琉球大学学術リポジトリ

琉球と日本本土の遷移地域としてのトカラ列島の歴史的位置づけをめぐる総合的研究

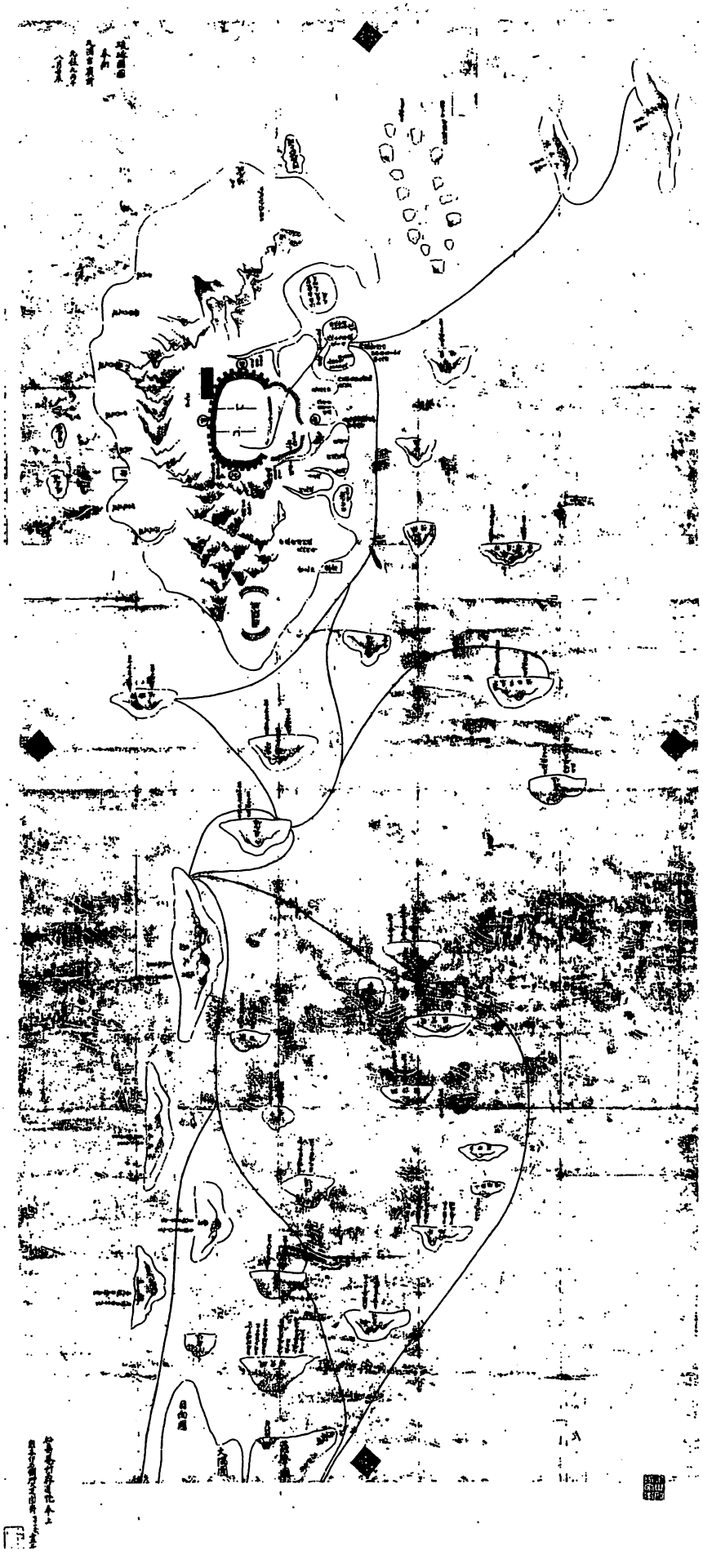
メタデータ	言語:
	出版者: 高良倉吉
	公開日: 2009-03-03
	キーワード (Ja): トカラ列島, 琉球, 十島村, 中之島, 奄美
	キーワード (En): Tokara Islands, Ryukyuan, Toshima village, Nakanosima island, Amami Islands
	作成者: 高良, 倉吉, 山里, 純一, 池田 栄史, 赤嶺, 政信, 狩俣, 繁久, 真栄平, 房明, 豊見山, 和行, 鈴木, 寛之, Takara, Kurayoshi, Yamazato, Junichi, Ikeda, Yoshifumi, Akamine, Masanobu, Karimata, Shigehisa, Maehira, Fusaaki, Tomiyama, Kazuyuki, Suzuki, Hiroyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9008

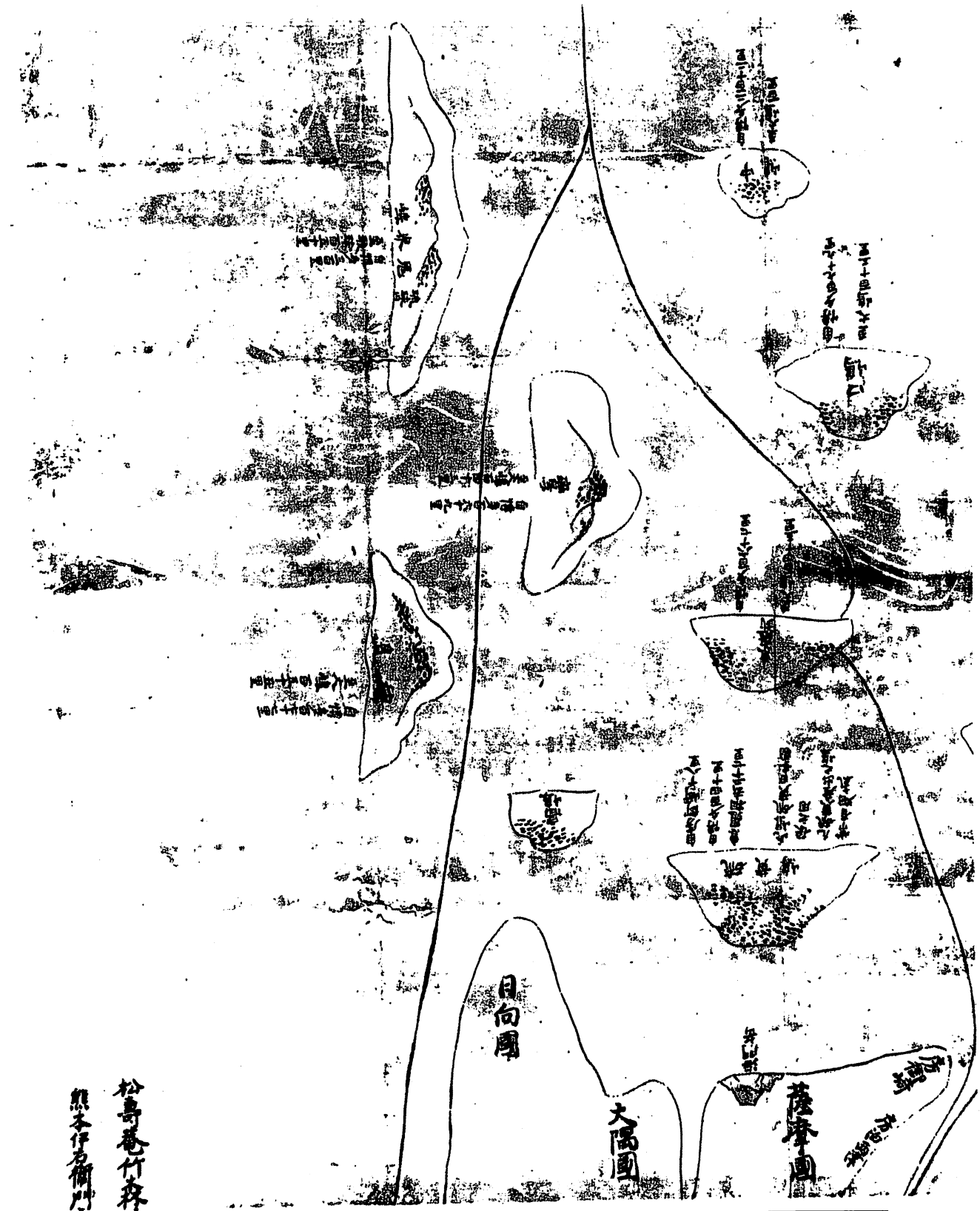
沖縄県立博物館所蔵『琉球國圖』

深　瀬　公　一　郎・渡　辺　美　季

（1）琉球國圖・影印
（2）琉球國圖・寸法及び印
（3）琉球國圖・記載情報の活字化及び地名比定
（4）琉球國圖・解題
（5）海東諸國紀・影印
（6）琉球國圖と海東諸國紀の比較表

（1）琉球國図・影印・①全体図



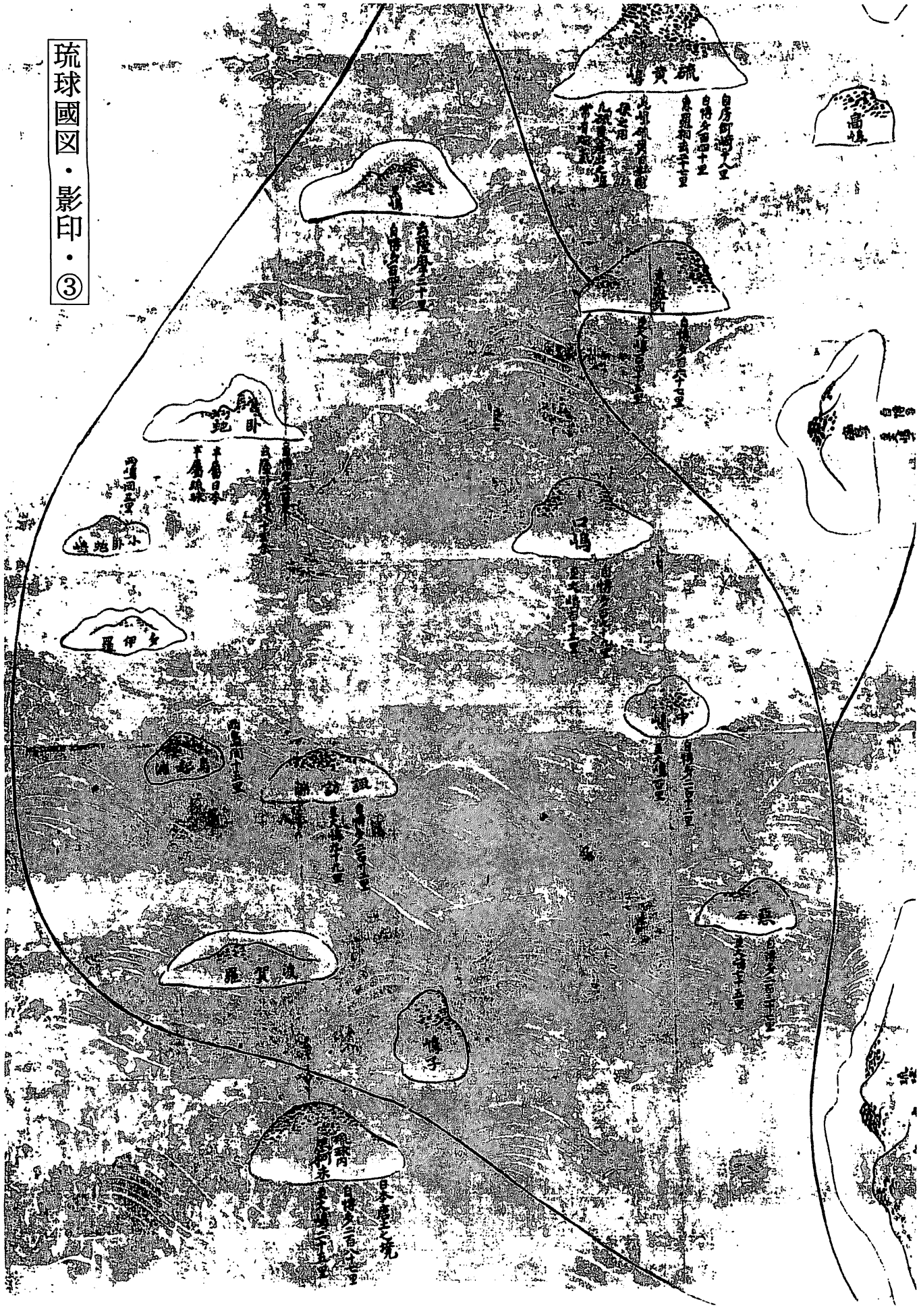


琉球國図・影印・②

松島菴什森道悅奉上

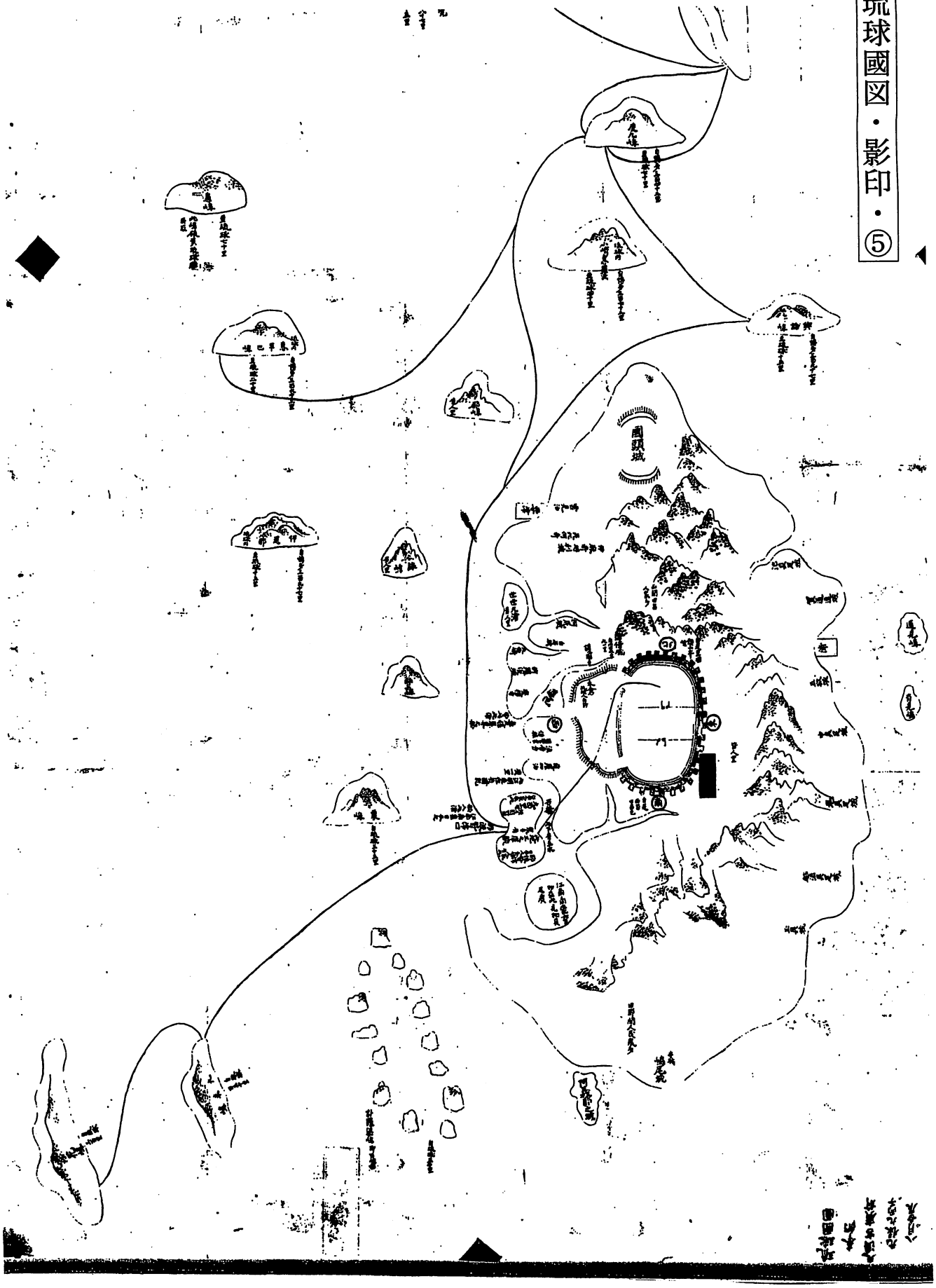
熊本伊右衛門八重圖寫

琉球國図・影印・③

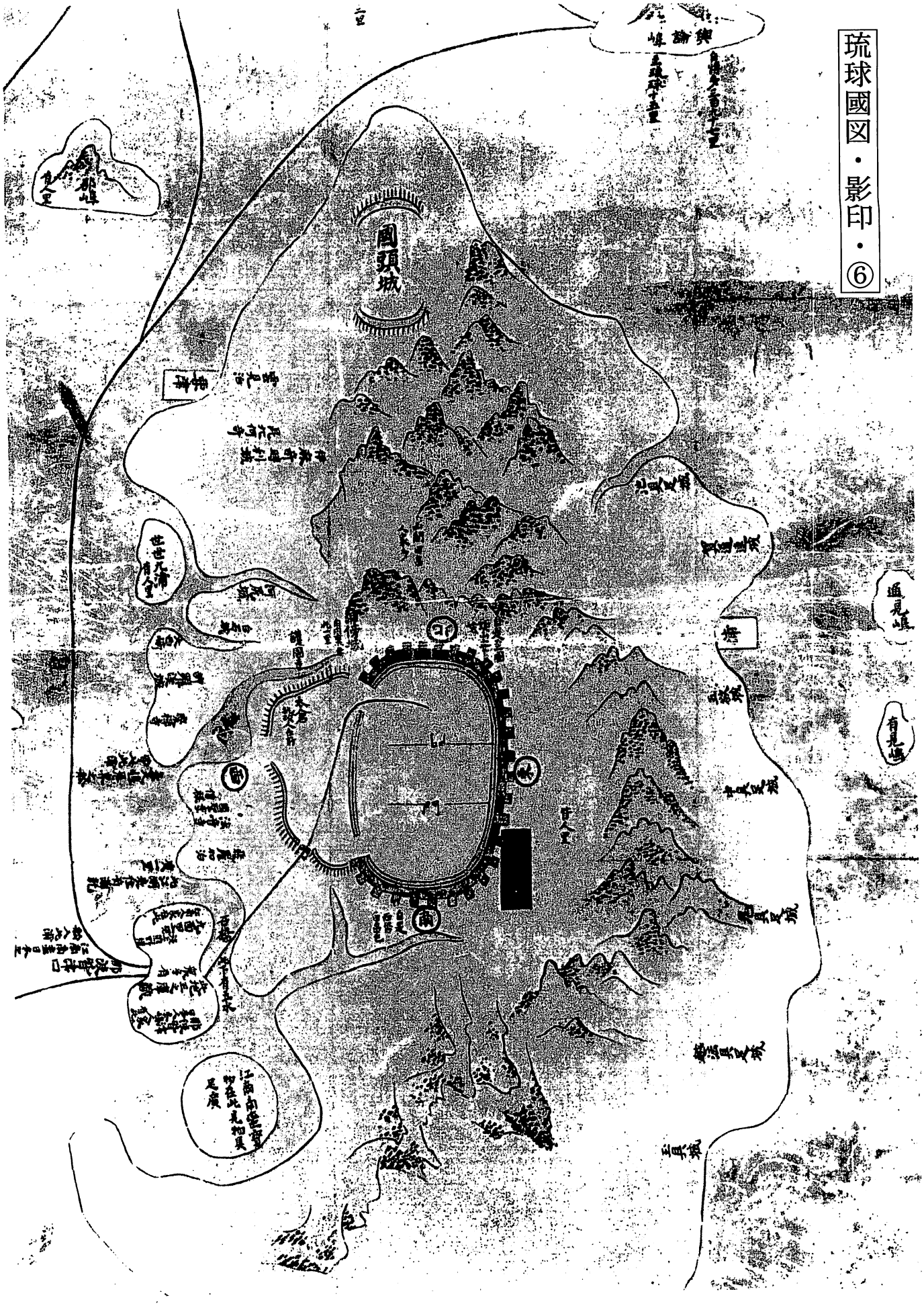


琉球國図・影印・④

琉球國図・影印・⑤

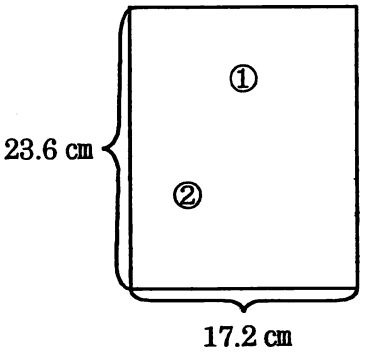


琉球國図・影印・⑥



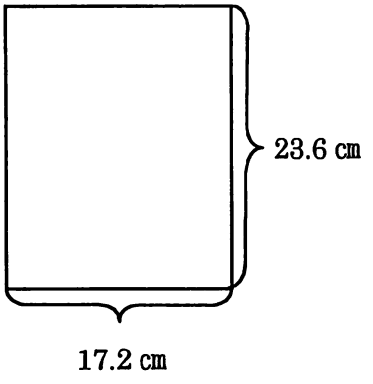
（２）琉球國図・寸法及び印

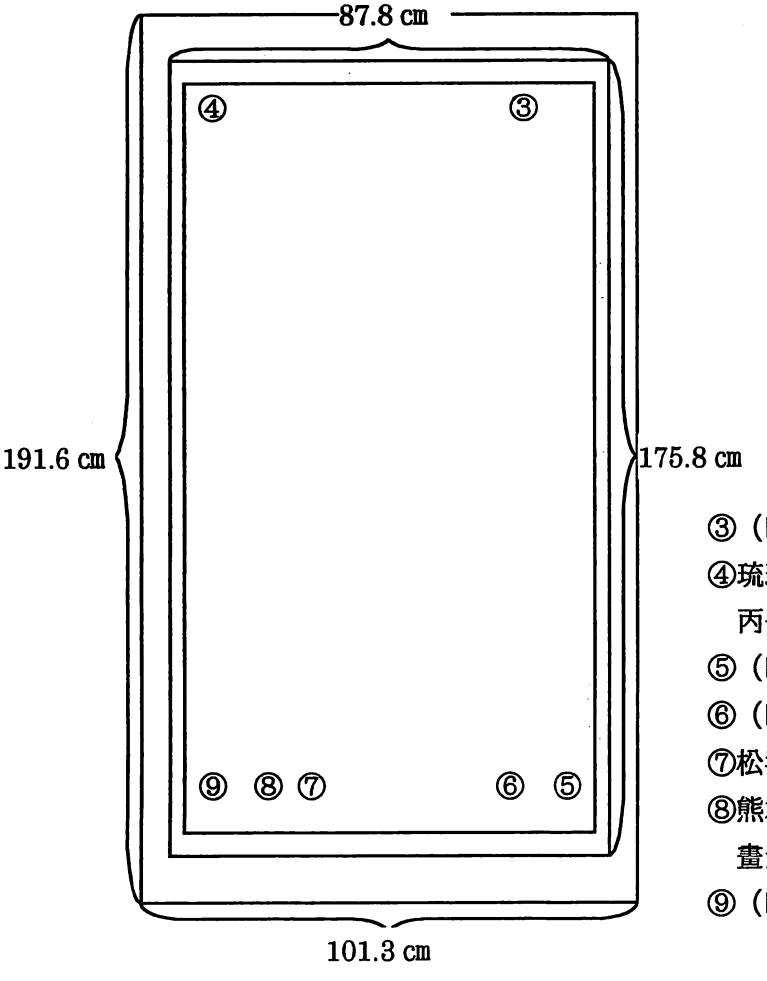
表紙



①（張紙）琉球國圖
②（印ａ）

裏表紙





③（印ｂ）
④琉球國圖奉納天滿宮廣前元禄九丙子八月吉辰
⑤（印ｃ）
⑥（印ｄ）
⑦松壽菴竹森道悦奉上（印）
⑧熊本伊右衛門入道圓齋七十一歳畫焉（印）
⑨（印ｅ）

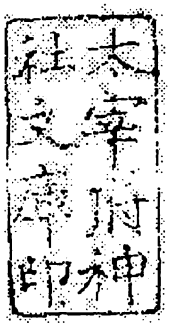
印a

印b

印c

印d

印e



（３）琉球國図・記載情報の活字化及び地名比定

（１）南九州～大隅諸島～トカラ列島～奄美諸島

①半島部

［薩摩國］

房泊兩津

：坊津と泊津。

房御崎

：坊ノ岬。坊津町南部から西南方海上に突出した半島先端にある岬。

海門岳

：開聞岳。古来、海上交通の目標となる。

［大隅國］

［日向國］

②島嶼部

種島／自博多百七十七里／至大嶋百五十五里

：種子島。

鸞／自博多百六十九里／至大嶋百四十三里

：屋久島。『海東諸國紀』には「亦島（ヤクシマ）」と記載されていることから、「鸞」は「亦島」の誤表記と思われる。

高嶋

：竹島。

硫黄嶋／自房御崎十八里／自博多百四十里／惠羅相去二十七里

／此嶋硫黄日本國採之用／凡硫黄産出之嶋常有炯氣

：硫黄島。硫黄岳は噴煙をあげており、硫黄・珪石を採掘。

惠羅武／自博多百六十七里／至大嶋百四十五里

：口之永良部。島の南西には良港があり、琉球諸島から上下する船は必ず停泊した。

口嶋／自博多百九十九里／至大嶋百十三里

：口之島。トカラ列島最北。

中嶋／自博多二百十二里／至大嶋百里

：中之島。トカラ列島に属する。

惡石／自博多二百三十七里／至大嶋七十五里

：悪石島。トカラ列島に属する。

黒嶋／去薩摩二十里／自博多百四十里

：黒島。

臥蛇／自博多二百里／去薩州房津八十里余／半屬日本／半屬琉球

：臥蛇島。トカラ列島に属する。

両嶋間三里

小臥蛇嶋

：小臥蛇島。トカラ列島に属する。

多伊羅

：平島。トカラ列島に属する。

鳥起湍

：未詳。諏訪瀬島周辺の瀬のことか。

両島間十五里

諏訪湍／自博多二百廿二里／至大嶋九十九里

：諏訪瀬島。トカラ列島に属する。

渡賀羅

：宝島。トカラ列島最南端。

嶋子

：小宝島。トカラ列島に属する。

琉球内／鬼界嶋／自博多三百里／至琉球百五十里

：喜界島。

琉球内／大島／自博多三百十二里／至琉球百里

：奄美大島。

度九嶋／自博多三百四十二里／至琉球七十里

：徳之島。

琉球内／小崎恵羅武／自博多三百七十二里／至琉球四十里

：沖永良部島。

與論嶋／自博多三百九十七里／至琉球十五里

：与論島

琉球内／思柯未／日本唐土之境／自博多二百八十七里／至大嶋二十五里

：未詳。『海東諸國紀』にも記載があり、須古摩［東恩納 1937］あるいは西古見［中村 1965］と比定されている。

（２）琉球

①周囲・西側（北→南）

國頭城

：未詳。根謝銘（ねしめ）グスク（大宜味村）か。或いはグスクではなく「国頭」という地域を指したものか。

雲見泊／要津

：運天（うんてん）港。

伊麻奇時利城／昆北何奇

：今帰仁（なきじん）グスク。『おもろさうし』では「みやきぜん」と記されている。「昆北何奇」は「是れ北の垣[1]」か。※『海東諸國紀』では「昆北河崎」。「自此北河崎」の誤記かとされる［東恩納 1937］。

世世九浦／有人里

：瀬底島。

河尻城

：未詳。本部町の渡久地港か（川は満名川か）。※『海東諸國紀』と位置が異なる。

白石城

：未詳。読谷村の座喜味グスクか（シラシ獄あり）。※『海東諸國紀』と位置が異なる。

大西崎

：読谷崎（残波岬のこと。「崎枝」とも言う）。

奇羅渓城

：北谷（ちゃたん）グスク[2]。『おもろさうし』には「きたたん」と記される。※『海東諸國紀』の比定では倉波（久良波。読谷山の古名。）とされてきたが［東恩納 1937］［申（田中訳注）1991］、よく見ると『海東諸國紀』（東大史料編纂本）は不明瞭で「波」とは読めない。また『海東諸國紀』を参照して作成されたと思われる島原本光寺本「混一疆理歴代国都之図」には「奇羅渓城」と記載されている[3]。こうしたことから従来「波」と解釈されてきた『海東諸國紀』の文字は「渓」である可能性が大きいと思われる。

慶禅寺

：未詳（解題本文を参照のこと）。

毒大嶋鬼界之舩／皆入此浦

：泊港（那覇市）。毒は徳（之島）。奄美諸島が薩摩の直轄領とされる以前、奄美大島・鬼界島・徳之島・永良部島・与論島の五島の船は、国頭方、西海諸島（久米島・慶良間島など）の船と同様に上納（貢租）を積んで泊港に入港していた。

---

1 「垣＝山北」の意か（久手堅憲夫氏のご教示による）。或いは「垣＝垣根で取り囲んだ官衙」の意か。

2 渓を「谷」と読む（久手堅憲夫氏のご教示による）。

3 橋本雄氏のご教示による。

國聖寺／僧禄

：未詳（解題本文を参照のこと）。

法音寺

：報恩寺か。報恩寺は臨済宗の寺。1438年の段階で存在しており、『琉球國由来記』(1713年成立）の編纂時には既に廃寺であった。所在地は首里汀良町とされる。

飛羅加泊

：未詳。泊港の一部を指すか。

此江湖來往有滿乾／廣一里　（此の江湖は来往に満乾[4]あり。広さ[5]は一里なり。）

：那覇市の久茂地～泊一帯（戦前まで潟原（かたばる）と呼ばれた）。

那波皆津／日本人本嶋人家有此　（那波皆津。日本人・本嶋人[6]の家、此に有り。）

：那覇港。

此地王之庫藏／衆多有　（此の地は王の庫藏衆多有り。）

：親見世（ちゃみせ）。本来は貿易で得た公物を納め専売する役所であった。『琉球國由来記』には「往古ハ那覇四町ノ公界所也。且諸方國々、通融之時、公物取納賣拂、役座タル故、親ミセト云ヨシ」とある。

九面里／江南人家在此　（九面里。江南人[7]の家、此に在り。）

：久米村（那覇市）。現在の那覇市久米にあった中国系住人の集落。

波上熊野権現

：波上宮（なみのうえぐう）（那覇若狭町村）。琉球八社の一つで熊野三社権現を祀る。創建年代は不明。

石橋／此下有五水　（石橋。此の下、五水有り。）

：長虹堤（ちょうこうてい）。1452年の冊封使渡来に向けて1451年頃に建設された約1㎞の海中道路。浮道とも言う。安里橋からイベガマ（久茂地譜嘉地と若狭町新村渠の接点）に至る。石段七座。※道安が朝鮮に『海東諸國紀』原図とされる地図をもたらしたのは1453年である。

那波皆津口／江南南蛮日本之／舩入此浦　（那波皆津口。江南・南蛮[8]・日本の舩、此の浦に入る。）

：那覇港口。『おもろさうし』に「唐　南蛮　寄り合う　那覇泊」[9]とある。また『朝鮮王朝実録』に「南蛮・日本国・中原の商船、来りて互市す」（世祖八年二月辛巳）とある。

江南南蠻寶物在此／見物具足廣　（江南・南蛮の宝物、此に在り。）

---

4 満潮・干潮。
5 河口の広さ。
6 琉球人。
7 中国人。
8 東南アジア。
9 「唐・南蛮の船が寄り集まる那覇港よ」（下・13頁）。

：御物グスク。『混効験集』[10]には「みものぐすく」とある（見物は「美しい・立派だ」の意の美称）。

②周囲・東側（北→南）

池具足城

：伊計グスクか。『おもろさうし』に「伊計島の杜ぐすく」とある。

賀通連城

：勝連グスク。

浦

：中城湾。

五欲城

：越来（こえく）グスク。

中具足城

：中城（なかぐすく）。

鬼具足城

：未詳。『おもろさうし』に「鬼ぐすく」とある（鬼は「立派な・すぐれた」の意味の美称）。

越法具足城

：大城（おおぐすく）。ウフグスク。

玉具城

：玉城（たまぐすく）。

守城／嶋尾城

：島尻大里グスク。山南王の居城。朝鮮漂着民肖得誠らの見聞談によって一四六一年まで城が実在していたことが知られるが、一六八三年に来琉した汪楫の『使琉球雑録』によると当時既に廃城だったという。

田野間人民衆多　（田野の間、人民衆多なり。）

阿義那之城

：未詳。瀬長グスクか。『琉球國旧記』に「瀬長城。在豊見城郡志茂田、我那覇邑外、西海中。潮水退時、則掲衣齊行。到彼地、潮水漲滿、則用船隻、以爲往還。」とある。或いは真壁間切名城村（糸満市）の「アイゲナ森」か（『琉球國由来記』）。

---

10 1711年成立の琉球方言の辞書。

③王城周辺（北→西→南→東）

山間田畠人家多　（山間に田畠・人家多し。）

北／自是至國頭山峯嶮　（是より国頭に至るまで山峯嶮し。）

浦傍城／自内裏至此一里　（浦傍城。内裏より此に至るまで一里なり。）

：浦添グスク。首里城が王都となる以前（15 世紀初頭頃まで）の中山の拠点であった。

護國寺

：14 世紀後半に創建されたとされる「護国寺」。開山住持頼重（薩摩坊津一乗院の住僧）の入滅が 1384 年である。現在波上にある護国寺は、廃寺となっていた大安禅寺[11]跡に日秀上人が来琉[12]し創建したとされる［島尻 1980］。

蓮池

：竜潭（首里）。

太倉／执政人在所　（太倉。执政人の在す所なり。）

西

南／自是西皆田畠也　（是より西皆田畠也。）

東／皆人里　（皆人里なり。）

「門」×3（首里城内）

琉球國（紅色の四角の中に墨書）

④島（北から西回りで）

鳥嶋／至琉球七十里／此嶋硫黄琉球國所取　（此の嶋の硫黄は琉球國の取る所なり。）

：鳥島。硫黄の産地である。

琉球内／惠平也嶋／自博多三百九十二里／至琉球二十里

：伊平屋島。

郡嶋／有人里

：古宇利島。

琉球内／伊是那／自博多三百九十七里／至琉球十五里

：伊是名島。

泳嶋／有人里

：伊江島。

師子嶋

：未詳。渡名喜島か[13]。或いは水納島か。

粟嶋／自琉球三十五里

---

[11] 1430 年に柴山が創建。

[12] 1523 年とされる［島尻 1980］。

[13] この場合は、師を「もろ（諸）」と訓じる。渡名喜島は島形から現地では「二股の島」と呼ばれることがあった。（久手堅憲夫氏のご教示による。）

：粟国島。

訃羅婆嶋／即百嶋也／自琉球五十里

：慶良間列島。

九米嶋／自琉球百五十里

：久米島。

花嶋／自琉球三百里

：未詳。花瓶嶼か（尖閣列島の中の一島）[14]。

有見嶋

：未詳。宇堅か。或いは久高島を指すか。

通見嶋

：津堅島。

---

14 『日本一鑑』には「花瓶嶼」の記載がある。

解題：沖縄県立博物館所蔵『琉球國圖』

深瀬公一郎・渡辺美季

0．はじめに

2003年12月13日のワークショップ終了後、研究代表者の高良倉吉先生より沖縄県立博物館所蔵の『琉球國圖』の調査・紹介を担当してみないかとのお話をいただいた。聞けば『琉球國圖』は、『海東諸國紀』中の「琉球國之圖」に酷似した古地図だという。先生によると、この地図は既に琉球を中心とした約二分の一部分の影印が『浦添市史』［浦添市史 1981］に載せられているにも関わらず、従来殆ど注目を浴びることが無かったが[1]、最近、安里進氏が首里城研究会において行った報告の中で、この古地図が『海東諸國紀』「琉球國之圖」の原図である可能性を指摘し［安里 2003］、県内で注目を集めつつあるとのことであった。

翌日、早速『琉球國圖』の実物大の影印版を所蔵している浦添市立図書館沖縄学研究所に赴いた。見ると確かに描かれた地形や記載事項は『海東諸國紀』中の「琉球國之圖」と非常によく似ており、更に地図の記載内容は明らかに『海東諸國紀』よりも詳細であった。そのため『琉球國圖』が『海東諸國紀』と何らかの関連性を持つ地図であることは間違いないと感じた。

『海東諸國紀』は1471年に朝鮮王朝の申叔舟によって編集された書物で、日本・琉球の歴史・地理・風俗・言語・通交について記述した総合的研究書である。そこには琉球の地図として「琉球國之圖」が所収されているが、これは、1453年に琉球使節として朝鮮を訪れた博多商人・道安が持参した地図をもとに作成されたといわれる。そしてこの「琉球國之圖」は、琉球全土を詳細に描いた最古版の地図とされてきた。

このような「琉球國之圖」と明確に何らかの関連性を持つ『琉球國圖』を調査し、その史料的価値を探り、多くの研究者が利用できる形で公開することは、高良先生のご指摘の通り非常に意義のあることであろう。そう強く感じた我々は、この仕事をお引き受けすることにしたのである。しかしなにぶん報告書作成までに残された時間も短かったこともあり、次の三点に目標を絞った。

①地図の実物を調査して、記載事項を文字に起こし、現在の地名との比定作業を行うこと。
②地図の史料的価値を考察すること。特に『海東諸國紀』と比較し、その関連性を考察すること。
③地図を研究により利便な形で「史料化」し、地図情報を公開すること。

以上の目標を掲げ時間との戦いで進められた我々の作業は、高良先生のご指導に加え、沖縄県立博物館やトカラ科研のメンバーの方々及び関連する各研究機関・研究者の方々からの多くのご

---

[1] 島尻勝太郎氏は県立博物館の『琉球國圖』の存在を指摘し『海東諸國紀』との関連性を簡単に指摘している［島尻 1980：6］。

示唆を受け、その結果なんとか本稿の完成に至った。この原稿は、諸方から得た多くの指摘と先学の成果を総括し、我々なりに整理し解釈を加えたものである。

1．地図の概要

2004 年1月 16 日（金）、沖縄県立博物館において『琉球國圖』の調査が行われた。調査に当たったのは高良倉吉先生、高良由加利氏（琉球大院生）、及び我々二人である。

この地図は 1978 年に県内の某店から県立博物館が購入したものである。当初は折り畳まれ表裏に表紙[2]のついた状態であったが、博物館への受け入れ後、軸装された。地図は琉球から薩摩までを彩色で描いたものである。

画面左上に「琉球國圖／奉納／天滿宮廣前／元禄九丙子／八月吉辰」（五行）、左下に「松壽菴竹森道悦奉上／熊本伊右衛門入道圓齋七十一歳書焉」（二行）と墨書され、各自の名の下にそれぞれの朱印[3]が押されている。このことからこの地図は、元禄九年（1696）八月十三日に松寿庵竹森道悦なる人物によって太宰府天満宮に奉納されたものであり、この地図を描いたのは 71 歳の熊本伊右衛門入道円斎なる人物であることが分かる。

二人の名の横には、「太宰府神社文庫印」の朱印がある。その他に「太宰府文庫」「天満宮」の朱印も押されている。このことからこの地図は太宰府天満宮文庫に旧蔵されていたことが判明する。

地図の寸法、捺印の位置などに関する詳細は（2）の「寸法及び印」を参照されたい。

2．地図の出自

ここでは、この地図がどのような人物によっていかなる経緯で作成され天満宮へ奉納されたのか、という問題を若干考察してみたい。

①竹森道悦と円斎

『琉球國圖』を奉納した竹森道悦、及びこの地図を描いた円斎はどのような人物であったのだろうか。その手がかりは地図上に記された二人の氏名と円斎の年齢（71 歳）くらいであり、当初は大海に一粟を掴むような探索作業であった。しかし、調査を進める内、二人が以下に述べるような人物であると分かった[4]。なお関連情報が資料１にまとめてあるので併せて参照されたい。

a．竹森道悦（松寿庵）

竹森道悦は、福岡藩黒田家の家臣の一人である。祖父は黒田二十四騎の一人である竹森新右衛門次貞〔石見守〕（1550-1621）であり、その八男新右衛門利友（1599-1674）の長子で、九男道策（1603-1633）の養子となった。1625 年頃の生まれと見られ、19 歳の時に京都に赴き医術を学んだ。京都で養壽院に属し、松壽菴と号するようになった。また医業の傍ら、藤原惺窩の子で

---

[2] 表表紙の中央に「琉球圖」と書かれた白い紙（横 3.4 センチ、縦 15.7 センチ）が貼ってあり、その脇に「太宰府天神文庫」の朱印が押されている。資料２-②の朝鮮國圖も参照のこと。

[3] 道悦が壺形朱印、円齋が角形朱印。

[4] 二人の素性の判明は、朱雀信城・梶嶋政司両氏の的確なご教示によるところが大きい。

下冷泉家を継いだ羽林集陰の門下で経史を学んだという。京都遊学は 20 年にわたり、その後、五島淡路守盛房の招聘に応じて五島に下り、采地二百五十石を賜った。道悦の妻は、盛房の妻の妹（櫛笥大納言の娘）であった。延宝３年（1675）に、利友の願いを受けた黒田光之が盛房に請うて道悦を帰国させ、二百五十石を与えた。天和３年（1683）に祖先の編んだ『竹森家記』を改編している。貝原益軒やその弟子の竹田春庵の日記にしばしば登場することから彼らと交流があったことが窺える［九州史料刊行会 1955・1956a］［川添等 1984］。益軒日記の元禄 12 年 12 月の条に「今年竹森松庵下世」とあることから、元禄 12 年（1699）に 74 歳で逝去したことが分かる。

b．熊本伊右衛門円齋

『筑前名家人物志』に「眞碩　熊本伊右衛門守清蘇一子圓齋ト云フ。衣笠守昌ノ門人。」とある。道悦と同じ歳であったらしい（資料２参照のこと）。衣笠守昌（半助）は、狩野探幽に絵画を学んだ黒田家の御用絵師であるので、円齋も狩野派の流れを汲む画家の一人と考えて良いだろう。

②太宰府天満宮へ奉納された地圖類

ところで調査を進めていく内に、道悦と円齋が天満宮へ奉納した地図は『琉球國圖』だけではなく、他に少なくとも九点が存在することが分かってきた（資料２参照）[5]。以下の通りである。

元禄九年八月吉辰の奉納	琉球國圖・大明全圖・朝鮮國圖・蝦夷嶋圖・肥前長崎圖・大内裡圖・京都圖・日本國圖
元禄十一年九月吉日の奉納	世界圖（四枚組）・當代博多圖

これらの地図に記された奉納時期は「元禄九年八月」或いは「元禄十一年九月」である。つまり元禄九・十一年に、道悦は天満宮に次々とこれらの地図を寄進したことになる。これらの地図類の情報は資料２にまとめたが、現段階で判明している特徴を簡単に示すと次のようになる。

＊琉球國圖・＊朝鮮國圖・蝦夷嶋圖・＊肥前長崎圖・大内裡圖・世界圖・當代博多圖 （彩色・手書）	・琉球國圖：古琉球（＝中世）の記載内容。『海東諸国紀』の「日本國西海道九州之圖」「琉球國之圖」と酷似するも相違点も多い。 ・蝦夷嶋圖：1668-70 年頃の記載内容か。正保日本図に似るが完全には一致せず。 ・世界圖：マテオ・リッチの世界図（両儀玄覧図）に似るが相違点も多い。
＊大明全圖 （彩色・手書）	当時京都で出版された『大明九辺万國人跡路程全圖』の書写。
＊京都圖・日本國圖 （手彩色・木版）	当時出版された地図に銘文を記入して奉納。奉納者である道悦の名のみが記される。

[5] 資料２に記したように実に多くの方々のご協力をいただいた。また高木崇世芝氏は、道悦が蝦夷嶋圖・世界圖・日本圖などを太宰府天満宮に奉納した事実を、既に［高木 2000：99］において指摘されていることを特記しておきたい。

（※下線部は所在が判明しているもの。＊印は本稿に影印を付したもの。）

これらの特徴からは、①奉納主体はあくまでも竹森道悦であること、②既刊の地図を忠実に模写したか、道悦が年月・氏名などを記入しただけの市販の木版地図が含まれていること、③しかしもっとも多いのは如何なるソースによって作成されたのかが判然としない地図であり、このことから道悦らは何らかの――恐らく当時としてもある程度は稀有な――絵地図を模写した（或いは少なくとも大幅に参照した）可能性が高いこと、などが指摘できるだろう。

③地図類奉納の背景

道悦らが、どのように地図作成の情報源（≒多くの地図類）を入手し、なぜ地図を作製（おそらくは複製）し、なぜ元禄 10 年前後に、なぜ太宰府天満宮に奉納したのか。この問いに直接答え得るような確証には残念ながら未だ至っていないが、幾つかの手がかり示しておきたいと思う。

a．太宰府天満宮文庫

『琉球國圖』を所蔵していた太宰府天満宮文庫は、延宝四年（1676）に創設され、その蔵書は主に寄進に拠っていた。そして蔵書の寄進目録である「延宝四丙辰年天満宮御文庫書籍寄進帳」[6]には以下のような記事を見出すことが出来る。

一　國々所々圖共十九巻　　竹森松寿菴道悦

すなわち道悦が「國々所々圖」19 巻を太宰府天満宮文庫に奉納したことが判明するのである。この図類の奉納年代は不明だが、「元禄四年（1691）」と「享保元年（1716）」の項目の間に書かれているので、恐らくその間であろう。寄進帳に見える道悦の書籍は、この一点のみである。無論この記載からだけでは断定できないが、この「國々所々圖」の中に、『琉球國圖』をはじめとする一連の地図類が含まれていた可能性は極めて高いように思われる。

さて太宰府天満宮文庫を説明する上で欠かせないのは、筑前福岡の藩士にして学者であった貝原益軒との関連性であろう。周知の通り貝原益軒（1630-1714）は、藩主及び藩士への講学を担い、群を抜く博識を以て儒学・教育・本草学などの方面に膨大な著作を残した人物で、「学芸を中心とした福岡藩の元禄文化は貝原益軒を基軸にして展開したといっても過言ではない」と評されている［西日本文化協会 1993：46］。益軒はまた太宰府天満宮に深い崇敬を寄せており、『菅神故実』や『太宰府天満宮故実』を著した。後者の中で益軒は天満宮文庫の創始について次のように記している。

> 延宝丙辰[7]の年、宮司検校坊快鎮、文学に志あらん人のたよりにもなれかしとて、神殿のいぬゐの辺りに、御社の文庫を一宇、はじめて営み作れり。衆力をからずして成ぬ。頓て四方の國より経史其外もろもろのふみをも、多く爰に納め奉れり。いみじき神宝成べし。[8]

6　［川添等 1987：475］。
7　延宝四年（1676）。
8　［貝原 1973：852］。

そして先に触れた寄進帳によると、文庫の建物が完成したとされる四年後（1680）あたりから、元文四年（1739）の頃にかけて、書物の寄進がすすみ381部（約3500冊）を数えるようになるという［筑紫1969：55］。その内、益軒を含む貝原一家の寄進が他の追随を許さない部数に上っており、また益軒と極めて親しい関係にあった大名・学者・版元などからの寄進も少なくなく、天満宮に崇敬の深かった益軒の存在が何らかの推進力となった可能性が考えられる［筑紫1969：57］。勿論このような活発な寄進の背景に、藩主である黒田光之・綱政による天満宮崇敬・保護があったことは言うまでもない［筑紫1969：53］。

先にも触れたように益軒の日記の中には、竹森道悦がしばしば登場する。また益軒の筆頭の門人であった竹田春庵（定直：1661-1745）の日記からも、道悦と春庵の間には交流があったことが窺える[9]。更に円齋の師匠である衣笠守昌は、益軒に従って制作した幾つかの絵図を残しており、益軒とはそれなりに親しい関係にあったらしい［西日本文化協会 1994：375］。他にも、益軒の『雑記』「旧識」［九州史料刊行会1956b］の項には、道悦の実弟である竹森素夕（利実）の名が挙がっている。こうしたことから道悦や円齋の行動や交際と、益軒を中心とするような福岡藩の学芸ネットワークとは密接に結びついていたと考えられ、そこには「太宰府天満宮文庫への書物の寄進」を一種の好ましい規範と捉えるような思潮が存在したと思われる。

更に注目すべきはこの学芸ネットワークの中で、本の貸借や購入の仲介が活発に行われていたことである。例えば益軒の蔵書[10]には、公本[11]及びそれに準ずる書籍86部、私書775部を数えることができ、竹田春庵をはじめ借用を求める者が少なくなかった［井上 1963：197-198］。またその中には益軒が借覧して春庵等に写させた写本も少なくない［井上1963：188-189・199］。『家蔵書目録』中の「私書目録」には図絵19部が挙げられており、その内には日本圖・京圖・江戸圖・伊勢圖・大阪圖・中華輿地圖・吉野山圖の七種の地図が含まれている［九州史料刊行会1961：55］。また別の項には『海東諸國紀』も見出すことができる。更に益軒の元には長崎や京都の本屋から目録や見計らい本が届けられ、益軒はそれらの本を、春庵を介して藩内の希望者に取り次ぐ役割も担っていた［井上 1963：190-192］。益軒はまた世界地図にはとりわけ関心を持っていたらしく、元禄16年（1703）11月には藩の文庫に入った「世界図」に「好学の血を湧かせて見入り」［井上 1963：144］、正徳元年（1710）、長崎の郭甚右衛門なる人物の珍しい世界図が益軒の序を請うために届けられた際には直ちに春庵へ星野実宣[12]同伴で見学に来るように便りを出しているという［井上1963：225-226］。

道悦らの模写した地図類の出所は不明であり、或いは20年間にわたる京都遊学中に道悦が自ら入手したものであるかもしれないが、これまで述べてきたような藩内の学芸状況の中で地図が作成されたことは踏まえておく必要があるだろう。

また福岡藩は、幕命により佐賀藩と交替で長崎警備役に就いていた。このため藩士たちは常に

---

9 ［川添等1984：中406-7・523-4、下185］。
10 『家蔵書目録』［九州史料刊行会1961］。
11 藩庁の本。
12 藩内和算家の祖で測量・天文にも通ずる人物。

外国事情を探知する必要があり、また長崎との関わりの中で「外」の諸相に触れる機会に恵まれていた。道悦らの奉納した地図に異国・異域に関わるものがとりわけ多いことは、こうした福岡藩という環境条件やニーズが遠因となっている可能性も指摘できよう。

b．元禄國絵図の作成

次に「なぜ元禄 10 年前後」かつ「なぜ地図」なのかという問題を考えてみたい。この理由を直接的に示す史料には現段階では巡り会っていないが、特記すべき事実として「元禄十年から元禄十三年までの間、福岡藩では『元禄国絵図』が作成されていた」ことに触れておきたい。

元禄九年十一月、国絵図を改訂したいという将軍綱吉の意向が幕閣に伝えられ、翌十年閏二月四日に諸国の収容大名の江戸留守居たちが幕府評定所に召集され、国絵図改訂の国ごとの受持が割り当てられた［川村 1990：120］。『黒田家譜』にも以下のように述べられている。

> 去ぬる元禄十年閏二月四日、大目付仙石伯耆守より諸家の留守居を評定所に召寄られ、同職并勘定奉行列座にて仰渡されけるハ、正保の年官庫に納めおかれし諸國の繪圖、詳ならさるに依て、新に繪圖を製し、上納せらるへしとの事なり。又此事に依て相伺ふ品あらハ、役人を出し伯耆守へうかゝひ申さるへし。正保の古繪圖も校合のため、拜借望に候ハゝ御借渡し有へき由、仰渡されける。諸國繪圖の惣司ハ、井上大和守 寺社奉行 是を司り給ふ。（中略）度々評定所并大和守の宅に、諸家の留守居を召寄、新圖の事を下知せらる。此方よりも毎度南部新左衞門 留守居 を指出し、其命を聞しめられ、正保の古繪圖をも拜借し給ふ。［川添等 1982：160］。

国元でも江戸からの連絡を受けて絵図制作の惣司[13]及び諸役人が定められた。その中には貝原久兵衛（＝益軒。使者列儒者）やその甥である貝原市之進（納戸與）も入っていた。また円齋の師である衣笠守昌は、絵図惣裁を勤めることになった[14]。以降、約四年の月日をかけて絵図が作成され、元禄 14 年 6 月、幕府に献納された。当時江戸に居た竹田春庵（助太夫）は絵図の提出に協力している。

道悦らが太宰府天満宮に多くの地図を奉納した元禄九年八月は、国絵図作成の開始以前のことであり、こうした藩内の動きが彼らの行動にいかなる影響力を持ったのか現段階では判断し得ない。しかしこの時期、藩内では地図への関心が高まり、地図作製の重要性が共通に認識されていたこと、またそれに深く関わる人々が道悦の交流圏の中に存在したことは確かである点のみ指摘しておきたい。

---

13 当初は浦上彦兵衛（家老）が任命されたが、翌年の春に江戸に派遣される予定であったので、元禄 11 年 4 月より鎌田八左衞門が代わり役を勤め上げた。また本段落の史料は全て［川添等 1982：161-165］による。

14 当初は狩野友元が任じられたが、「他の要用有りて」守昌が交替した。

３．記載の特徴

①古琉球に関する記載

琉球史研究では、12 世紀頃から 1609 年の薩摩藩の琉球侵攻までの期間を「古琉球」と捉えるのが一般的である［高良 1987：361］。これは日本史でいう中世にほぼ相当する期間である。そして 1609 年以降 1879 年の琉球処分までの期間は「近世琉球」と定義される［高良 1987：361］。

さて『琉球國圖』は元禄９（1696）年、すなわち「近世琉球」に作成されたものであるが、その記載内容は明確に「古琉球」の状況を示すものであり、それが本地図の最大の特徴であると言っても過言ではない。以下、その記載内容を検討し、その史料的価値を考察していく。

ａ．那覇に関する記載

往時は浮島であった那覇及びその付近の様子が詳細に記載されていることは、この地図の大きな特色の一つである。諸民族雑居の状態（「那波皆津、日本人本嶋人家有此」及び「九面里、江南人家在此」）や、南蛮・江南・日本船の出入り（「那波皆津口、江南南蛮日本之舩入此浦」）に関する記載は、諸研究によって解明されてきた古琉球の状況と一致している[15]。

また御物城（見物具足）が「江南南蠻寶物在此」と説明され、また泊港の機能が「毒大嶋鬼界之舩皆入此浦（※毒＝徳之島）」と記載されている点も、この地図の記載内容が古琉球のものであることを裏付けるものである。16 世紀半ばから南蛮貿易（東南アジア諸図との貿易）は衰退し、近世期には御物グスクは既にその貿易品収蔵庫としての機能を失っていた。『琉球國旧記』（1731 年成立）には「倉屋已廃。遺址猶存。」と記されている。また古琉球期には琉球に帰順していた奄美諸島の船が貢租を積んで泊港に入港していたが、薩摩侵攻後、彼の地は薩摩藩の直轄地となり琉球への入貢は行われなくなった。

ｂ．グスク（城）に関する記載

また数多くのグスクの記載もこの地図の大きな特徴であり、かつ地図の記載事項が古琉球のものであることを示している。『琉球國圖』記載のグスクは国頭城・伊麻奇時利城（今帰仁グスク）・河尻城・白石城・奇羅渓城（北谷グスク）・浦傍城（浦添グスク）・池具足城（伊計グスク）・賀通連城（勝連グスク）・五欲城（越来グスク）・中具足城（中城）・鬼具足城・越法具足城（大城）・玉具足城（玉城）・嶋尾城（島尻大里グスク）・阿義那之城及び首里城などである[16]。しかし近世に使用されたグスクは首里城、今帰仁グスク（17 世紀まで）、中城などのみである。また「島尾城」に「守城」とあるが、1683 年に渡琉した冊封使の汪楫がこのグスクを「廃城」（『汪楫　冊封琉球使録三篇』）と記しているように、近世期では「守城」という機能は有し得なかったと思われる。

また首里城は、その周囲が二種類の表現で描き分けられている。一方は堅固な城壁（タイプＡ）の部分であり、他方はその西側に広がる柵のような部分（タイプＢ）で北部の國頭城の周囲の描

---

15 代表的なものとして［高良 1993］。古琉球時の那覇に日本人が雑居していた点に関しては、［上里 2003］。

16 安里進氏による『海東諸國紀』の記載からの推測では、「具足」は「地名としてのグスク」を指すとされている［安里 1991：118-119］。

かれ方と同様である。この表現から、首里城には当時二種類の城郭があり、その一方は國頭城と同じタイプのものであった可能性が指摘できるだろう。國頭城は現段階で確定的な比定がなされていないが[17]、少なくとも国頭地域一帯において現在確認されているグスクに石積みのものは存在せず、全て堀や切岸など土からなるグスクであると言われている［沖縄県教育委員会文化課：1983：18］[18]。この点を鑑みて、『琉球國圖』の首里城の周囲の描き分けは、タイプＡが石積、タイプＢが土塁・切岸・柵列など石積以外の構造を示している可能性を指摘できるだろう。

ところで首里城は最終的には石積の内郭・外郭の二重構造を持つに至ったが（資料３参照）、内郭が第一尚氏王朝（1406-69）の創建と推定されるのに対し、外郭（歓会門・久慶門地区）は尚真・尚清二代（1477-1555）にわたって増築されたとされてきた［高良 1996］。だが考古学の側からは、従来「石積による外郭拡張期」とされてきた時代よりも早く、「外郭」部分は既に首里城内として利用されていた可能性が指摘されている［沖縄県教育庁文化課 1988：146］。こうした点や前述した『琉球國圖』における周囲の描き分けなどから、石積が築かれる以前に「外郭」部分が土塁・柵列・切岸など石積以外の構築物で囲われていた可能性も考えられるだろう[19]。

いずれにせよ、首里城の外郭形成の過程や時期に関しては未だに不明確な部分が多いのが現状である。『琉球國圖』の首里城に関する記載は、周囲の描き分けのみならず、タイプＡとＢの郭の間に「執政人在所」の記載が見られるなど興味深い情報を提供してくれる点で前掲の問題を考える一史料となり得るものであろう。今後考古学など諸研究の成果と合わせて分析が進められることを期待したい。

ｃ．寺社の記載

豊富な寺社の記載もまたこの地図の特徴の一つである。具体的には國聖寺（僧禄）・慶禅寺・法音寺・護國寺及び波上熊野権現が記載されている。この内、波上熊野権現は現在の波上宮（那覇市若狭）に比定できるとして、寺院に関しては、近世期に廃寺となった報恩寺が比定できる他は、みな該当寺院が想定できない。この点から本地図は残存史料が少なく不明な点の多い古琉球期の寺社の様相を伝える史料である可能性が指摘できる。以下、順に考察していく。

まず報恩寺（法音寺）は、1438年に中国の礼部に宛てた国王尚巴志の咨文にその名が見える[20]。この咨文が実際に発信されたかどうかは定かではないが、この咨文から、1438年の段階で琉球に「十刹」が存在し、その一つが報恩寺であったということは窺える［知名 2002：３］。

次に浦添城の近くに書かれる護國寺であるが、これは現在波上（那覇市若狭）にある「波上護國寺」とは別の寺院であると考えられる。島尻勝太郎氏は、現在の「波上護國寺」は大安禅寺[21]跡

---

17 「国頭城」がどのグスクに当たるか不明である。一説では国頭按司の居城を根謝銘グスク（國頭郡大宜味村）に比定する指摘もあり［沖縄県教育委員会文化課編 1983：26］、国頭地域を支配する按司の居城とみられる「国頭城」が根謝銘グスクである可能性もある。

18 詳しくは［当真 1997］を参照のこと。

19 上里隆史・山本政昭両氏のご指摘による。

20 沖縄県立図書館史料編集室編『歴代宝案』訳注本第一冊、沖縄県教育委員会、1994、522頁。

21 1430年に中国人柴山が自費で創建したとされる。『琉球國由来記』（1713年成立）の編纂段階

に日秀上人（1523年に来琉した日本僧）が創建した寺院であり、『琉球國圖』に見える「護國寺」は14世紀後半（察度王代）に創建された（開山住持頼重の入滅が1384年）と論じている［島尻1980］。日秀の琉球滞在期間は二十年余であるので、「波上護國寺」の創建年代は1523年から16世紀半の間であろう。従って『琉球國圖』に描かれているのは、少なくともそれより以前、すなわち浦添に護國寺が存在した頃の状況であると推察することができるだろう。

國聖寺（僧禄）及び慶禅寺に関しては、現段階で該当する寺院が見当たらない。琉球における僧禄は、天王寺住持が担っており［伊藤 2002：268］、円覚寺創建以降は円覚寺住持が務めたとされている［村井 1995：206］。但し天王寺の創建は尚円王代（1470-76）とされており、それ以前の琉球僧禄に関しては研究史上言及がない。『琉球國圖』における「國聖寺、僧禄」の記載と共に古琉球の僧禄の比定は今後の大きな課題と言えるだろう。先に、1438年の時点で琉球に「十刹」が存在したことを記したが、知名定寛氏はこの「十刹」に相当する可能性のある寺院を下表の①及び②であろうと推察している［知名 2002：10-14］[22]。

①	1438年の時点で確実に存在した寺院 〃　存在した可能性の高い寺院	極楽寺・大安禅寺・報恩寺 万寿寺
②	創建時期が推定できない寺院	大聖寺・霊応寺・永福寺・大禅寺・竜翔寺・潮音寺・永代院・東光寺
③	尚泰久王代（1454-60）の創建 〃　の可能性の高い寺院	天界寺 相國禅寺・普門寺・天竜寺・広厳寺・建善寺

これらの寺院の創建年代に関しては不明な点が多く有力な比定への手がかりは見当たらないが、「音」だけを鑑みるならば、「國聖寺」は「相國禅寺」（相國寺→國相寺（こくしょうじ））が、「慶禅寺」は「建善寺」が比較的近い「音」を持つように思われる。

d．古琉球の「領域」と「境界」

『琉球國圖』には、琉球およびその周辺地域が描かれており、そのなかで琉球王府の「領域」と「境界」が記されていることが特徴の一つである。『琉球國圖』に描かれている島嶼を見ると、喜界島・奄美大島・沖永良部島・「思柯未」・伊平屋島・伊是名島には「琉球内」とあり、これらの島々が琉球王府の「領域」とされている。

一方で、『琉球國圖』には、日本との「境界」も記されている。まず、奄美大島沖合に描かれている「思柯未」に注目すると、「日本唐土之境」と記されていることに気づく。「思柯未」は『海東諸國紀』にも記載されており、東恩納寛惇は奄美大島沖合の須古摩に、中村栄孝は奄美大島の西古見にそれぞれ比定しているが、はっきりとした比定はできていない［東恩納 1937、中村 1965］。しかし「至大嶋二十五里」とされていることから、「思柯未」が奄美大島周辺であることは間違いない。では「日本唐土之境」の「唐土」とは、何を指すのであろうか。地理的に「唐土」を中国とするのは無理があることから、より広義の「異国」という意味になろう。さらに「思柯未」は、

で既に廃絶していた。

[22] 但し必ずしも「十刹」＝「十ヶ寺」とは限らない点にも注意を促している［知名 2002：11］。

「琉球内」と表記され、琉球王府の「領域」とされていることから、具体的には琉球を指すとは考えられないだろうか。いずれにせよ、奄美大島周辺を「境界」として、トカラ列島以北を「日本」とし、奄美大島以南を「唐土」とする「境界」認識が示されていることになる。

この他にも、臥蛇島に「半属薩摩、半属琉球」という「境界」が記されている。臥蛇島がこのように琉球と薩摩の「半属」であったことは、臥蛇島に漂着した朝鮮人を送還した琉球國使者・道安が、礼曹に対して「半属琉球、半属薩摩」と述べており、また『海東諸國紀』においても「分属日本琉球」と記されていることから、従来の研究で注目されており、トカラ海域が 15 世紀中頃の中世日本と琉球との「境界」であったことが指摘されている［村井 1997］。

e．年代比定

ここまで『琉球國圖』に描かれたのは「古琉球」の状況である点を説明してきたが、いま少し年代を絞り込んでみたい。地図の内容の年代比定と言う点において注目すべきは、1451-2 年に築かれた長虹堤（石橋）が描かれている点である。すなわち地図はそれ以降の状況を描いていると推測できる。次に下限に関してであるが、「波上護國寺」の創建年代が 1523 年から 16 世紀半の間であるので、少なくともそれ以前であると考えられる。或いは、地図上に首里城の城壁が内郭部のみ描かれていると判断するならば、それは外郭の築かれる以前、すなわち 15 世紀後半から 16 世紀後半以前の状況であると推定することも可能であろう。

以上、『琉球國圖』の琉球王国に該当する部分の特徴を詳しく見た。その結果、この地国は古琉球期――特に 1451-2 年から 16 世紀半頃まで――の状況を描いたものであることが明らかになった。また地図作成時（元禄 9 年）の状況と思われる要素も見当たらなかった。このことからは、道悦らが何らかの原図を忠実に模写して『琉球國圖』を作成した可能性が非常に高いことが言えるだろう。

②海域圖としての『琉球國圖』

更に『琉球國圖』の特徴として、海域図としての性格をいくつか指摘することができる。

まず『琉球國圖』には、航路が紅線ではっきりと描かれている。北からその航路線を見ていくと、まず南九州から奄美大島にかけては、大隅半島東岸から種子島・屋久島の沿岸を通りトカラ列島を越えて奄美大島に至る航路、薩摩半島西岸から口永良部島を経由しトカラ列島を越えて奄美大島に至る航路、薩摩半島西岸からトカラ列島の西方を迂回して南下し奄美大島に至る航路の三つの航路線がある。航路線は奄美大島からさらに南方に延び、徳之島を経て那覇に至る。先述のように、那覇には日本・江南・南蛮の船が入港していることから、この北からの航路線は日本からの航路線となる。一方、那覇からは、西方にも航路線が延び、久米島を経て「花島」まで延びている。那覇には、日本船の他に江南（中国）・南蛮（東南アジア）からの船も入港していることから、この西方に延びる航路線はこれらの地域との航路線となる。このように『琉球國圖』に記された航路線は、那覇を基点として、琉球と日本・中国・東南アジアとの海上交通の様相を示していることになる。

次に『琉球國圖』には、それぞれの島ごとに里程が記されている。里程の基点は、奄美大島を境に二つに分けられる。奄美大島以北では、硫黄島・黒島・臥蛇島が薩摩坊津を基点としているが、その他はいずれも博多と奄美大島を基点とした里程表記である。一方、奄美大島以南では、里程の基点は博多と琉球となっている。すなわち、島の位置関係としての里程表記は、博多・奄美大島・琉球あるいは薩摩を基点として表されていることになる。里程の基点となっている琉球・奄美大島・薩摩は、いずれも航路線の寄港地点であることから、この里程表記は航路を意識したものであり、『琉球國圖』の航路線の延長には、当然博多も意識されているのであろう。里程表記では、基点の表記方法も興味深いものとなっている。基点として博多を表す場合は、「自博多」（博多より）となっているのに対して、奄美大島と琉球を基点とする場合は「至大嶋」・「至琉球」（大嶋・琉球に至る）となっている。この表記方法から、博多方面より奄美大島・琉球方面へ向かう航路が意識されていたと言えよう[23]。

『琉球國圖』を海域図として見ていくと、琉球における港、特に那覇についての記載も注目されよう。航路線がたどり着く那覇の港口には「江南・南蛮・日本之船、此浦に入る」と記載されており、那覇は琉球国外からの船が入港する港であったことがわかる。一方、那覇の北で現在の泊港（とまりこう）にあたるところには「毒（徳之島）・大島・鬼界之船、皆此浦に入る」と記載されている。先述のように、徳之島・奄美大島・喜界島は、いずれも古琉球期において琉球王府の支配下にあった島々であり、これら琉球国内からの船は、那覇ではなく泊に入港していたことになる。すなわち、古琉球では、江南・南蛮・日本などの琉球国外からの船が入港する対外港としての那覇と、徳之島・奄美大島・喜界島などの琉球国内からの船が入港する国内港としての泊とで、港が機能分化していたことになる。このうち記載が詳細なのは、対外港の那覇である。先述のように、那覇の諸民族雑居状態などが詳細に記されているが、さらに那覇の周辺海域についても、「此の江湖は來往に滿乾有り。廣さは一里なり」と河口の幅や干潟地帯が具体的に記載されている。恐らくこれは実際に那覇へ入船する際の注意事項として記されているのであろう。『琉球國圖』における航路線は、いずれもこの那覇に帰着していることから、航路線は琉球国外からの航路を意識して描かれていたことになる。

この他にも、海域図としての特徴がいくつか見られる。『琉球國圖』では、小さな島嶼までが詳細に描かれているのが特徴的であるが、特に詳しく描かれるのがトカラ列島である。黒潮の分流点であるトカラ列島海域は、「七島灘」として古来より海上交通の難所であったため、このように詳細に描かれているであろう。また、沖縄本島の記載を見ると、沖縄本島西岸についての記述は詳細であるのに比べて、東岸や沖縄本島の内陸部についての記載は簡略である。西岸地域についての記載が詳細であるのは、沖合に航路線が通っており、記載されているグスクや寺院が海上からの目印であったからであろう。これに対して東岸は、沿岸に航路線が通っていないため、表記も簡略になっていると考えられる。

では、このような海域図としての『琉球國圖』の記載情報は、どのような人々によってもたら

---

23 「自博多～至琉球」という表記の特徴については、伊藤幸司氏にご教示いただいた。

されたのであろうか。先述のように、『琉球國圖』では国内港である泊ではなく、対外港である那覇についての記載が詳細であることから、琉球国外と盛んに往来していた人物によるものであることが推測される。さらに、里程表記は博多方面より琉球方面へ向かうことが意識されていることから、琉球へ往来する博多系の人物が関与していたことが考えられる。

4.『海東諸國紀』との関係

さて『琉球國圖』の大きな特徴的として、『海東諸國紀』所収の「日本國西海道九州之圖」及び「琉球國之圖」((5) の影印を参照のこと) との著しい類似性も指摘できる。ここではその関連性について考察してみたい。

まず、これらの地図を俯瞰してみると、種子島・屋久島の大隅諸島やトカラ列島、さらに奄美諸島や琉球諸島など、島嶼の数やその配置が『琉球國圖』と『海東諸國紀』でほぼ同じことが分かる。特に「思柯未」や「鳥起湍」、「師子島」のように、近世以降の地名からは比定できない島々の記載までもが一致している。さらに沖縄本島に注目すると、島形の複雑な輪郭が殆ど違わず、また島の中央を南北に走る山脈も同じように表記されている。航路線は『海東諸國紀』ではやや不鮮明な部分が多いものの、南九州から奄美大島への至る三つの航路線や、那覇から久米島へと西へ延びる航路線も一致する。このように図像や図形及び島の配置を比較すると、両者は著しく類似しているのである。

次に、記載されている文字情報を比べてみたい。(6) に『海東諸國紀』との記載比較表を掲げたが、ここから次の二点が指摘できる。一点目は、地名表記がほぼ一致することである。『海東諸國紀』の地名表記は、大西・浦傍・郡島・鳥島などのように漢字の音訓を併用していることを特徴としている [東恩納 1979 : 73]。『琉球國圖』も全く同じように大西・浦傍・郡島・鳥島のように地名表記は漢字の音訓を用いて表記されており、さらに使用されている漢字もほぼ一致している。二点目は、沖縄本島に関しての記載内容は、『海東諸國紀』より『琉球國圖』の方がはるかに詳細であることである。先述のように、那覇に関する詳細な記載や首里城の構造の描き分け、寺社の記載などは、『海東諸國紀』には記載されず『琉球國圖』にのみ記載されている情報である。

以上のように、『琉球國圖』と『海東諸國紀』所収の「日本國西海道九州之圖」・「琉球國之圖」とを比較した結果、①図像や地名表記に関しては両者に著しい類似性があること、②琉球に関しては『琉球國圖』の方がより詳細な記載内容を持つことが指摘できる。

では『琉球國圖』と『海東諸國紀』との間にある著しい類似性及び決定的な相違点をどのように捉えればよいのであろうか。この問題については、『琉球國圖』の作成過程も含めて様々な可能性が考えられ、現段階で明確な結論を出すことは難しいが、ここでは一つの可能性として、『海東諸國紀』所収の「日本國西海道九州之圖」・「琉球國之圖」の原図とされる地図の性格と、『琉球國圖』との関連性を考えてみたい。

『海東諸國紀』所収の諸地図の内、「琉球國之圖」に関しては、1453 年に琉球国王尚金福の使者として朝鮮を訪れた博多商人道安が示した「博多・薩摩・琉球の相距つる地圖」(朝鮮王朝実録・端宗元年五月丁卯) が原図であるということが、すでに学界の定説となっている ([東恩納 1937]

［秋岡 1955］［中村 1965］など）。更にこの地図が「日本僧道安の齎（もたら）し来れる日本・琉球両國の地圖」[24]と換言されていることなどから、「日本國西海道九州之圖」及びやはり同書所収の「日本本國之圖」も同安の図に基づいている可能性が指摘されてきた［秋岡 1955：55］。またこれらの地図の性質に関しては、田中健夫氏が「日本本國之圖」及び「日本國西海道九州之圖」が「行基式日本図」[25]の系統、「琉球國之圖」が（琉球渡航の経験を持った）日本人または琉球人の手によるものと判断されている［申（田中訳注）1991：409-411］。

さてここで問題にしたいのは道安のもたらした「博多・薩摩・琉球相距地圖」の性格である。これを文字通り解釈すれば、「博多・琉球・薩摩」の何らかの相関関係を示すような地図ということになる。ところが『海東諸國紀』「琉球國之圖」における距離は「上松浦・琉球・薩摩」を基準として説明されている。また「日本國西海道九州之圖」も、「上松浦・薩摩・琉球（大島）」の距離関係で描かれている。中世において交通における肥前州上松浦は重要地域であり、その点からのみ鑑みれば『海東諸國紀』における距離の記載が上松浦との関係で示されるのは不自然ではない。しかし道安の地図はあくまでも「博多・薩摩・琉球相距地圖」であるという点をどう考えればよいのだろうか。

ところで『琉球國圖』における距離は、既述したように原則的に「博多・琉球・薩摩」の相関関係によって示されている。すなわちこの点において『琉球國圖』は、『海東諸國紀』の原図と同様の性質を有していた可能性を指摘できる。

更に『琉球國圖』の「自博多…至～」という里程表記からは、この地圖が「博多から琉球への道のり」を示すことを目的として作成された可能性を読みとれる。一方、『海東諸國紀』の原図（博多・薩摩・琉球相距地図）は博多商人であり頻繁に琉球に赴く道安の示したものである。従って「自博多…至～」という里程表記からも『琉球國圖』が、『海東諸國紀』の原図と同様の性質を有していた可能性は高い。

無論こうした点のみから『琉球國圖』が『海東諸國紀』「琉球國之圖」及び「日本國西海道九州之圖」の原図或いは原図系統の地図であると判断することはできない。しかし少なくとも、『琉球國圖』が、『海東諸國紀』と何らかの（それもかなり密接な）関連性を有する地図であること、また『海東諸國紀』の原図とされる道安の「博多・薩摩・琉球相距地圖」と、二つの点で『海東諸國紀』よりも近しい性質を有する地図である可能性は指摘できるだろう。

『海東諸國紀』に関しては数多くのすぐれた先学があるが、未だ解明すべき点は多く残されている。既に指摘したが、元来「博多・薩摩・琉球相距地圖」であったはずのものが、なぜ『海東諸國紀』では博多ではなく上松浦との距離関係で描かれているのかという問題はその一つである。またこの問題も含め、朝鮮王朝が道安の「原図」をどのように編纂したのかという問題もより考えていく必要性があるだろう。つまり朝鮮側で利用されることを前提とした場合、朝鮮人に利便なように、或いは理解され易いように「原図」の記載内容の整理・翻訳が行われた可能性、木版

---

24 朝鮮王朝実録・端宗元年七月己未の条。

25 平安時代～江戸時代初期、日本全図の基本型とされたもの。［秋岡 1955］に詳しい。

印刷という技術的な制限を受けて「原図」の情報を取捨選択している可能性などが一層考慮されるべきである。

こうした諸問題を考察する上で『琉球國圖』は貴重な示唆を投げかけてくれる素材であり、『海東諸國紀』研究（及びそれを使用した関連研究）にとって重視すべき史料であると言えるだろう。

5．おわりに

以上、従来殆ど注目されることのなかった沖縄県立博物館所蔵の『琉球國圖』について、地図情報を紹介するとともに、そのいくつかの特徴を指摘してきた。特に地図の出自や記載内容に関しては、『琉球國圖』が今後の諸研究に活用され得るように、可能な限りの情報を紹介することに努めたつもりである。しかし時間的な制約や我々の力量不足などから、今後検討すべき課題も多く残すことになった。最後に、本稿を簡単にまとめ、今後の課題をいくつか提示しておきたい。

『琉球國圖』は、「古琉球」期の琉球が詳細に描かれていることを特徴とする。そこには従来文献では確認できなかった多くの情報が含まれていることから、以後は古琉球に関する諸研究に大いに活用されるべきである。例えば、従来の限られた文献史料からでは知り得なかった情報を提供する寺院の記載は、古琉球の仏教史研究に新たな展開を可能にするだろう。また首里城の構造やグスクの情報については考古学の成果とも併せ、より一層の考察がなされることが望まれる。

海域図としての特徴に注目するならば、琉球を基点として、日本（博多）・中国・東南アジアとを結ぶ航路線が記載されており、15 世紀における環シナ海域と琉球の関係が示されている。その中における那覇の詳細な記載からは、環シナ海域における港市・那覇の特徴を考察できる。

更に『琉球國圖』は、近年注目されている地図史研究にとっても一つの重要な研究素材と言える。特に『海東諸國紀』との関連性からは、『海東諸國紀』の作成・編纂やその原図の性格を考察し得る貴重な材料であるだろう。

また近世史料としても『琉球國圖』は興味深い背景を背負っている。『琉球國圖』を含む多くの地図――その中には異国・異域に関わる地図がとりわけ多かった――を奉納した福岡藩士竹森道悦の行動からは、近世期における「個人」による地図の収集・作成、福岡藩における対外認識及び学芸ネットワークの状況、太宰府天満宮文庫の役割など、当時の様々な諸相を明らかにする手がかりを得られるのである。

もちろん『琉球國圖』自体の史料的価値及び記載内容や作製過程についての実証的検討は今後さらに重ねていく必要があるが、前述してきた様々な点から、『琉球國圖』が多くの可能性を有する研究素材であることは明らかであろう。今後この素材が、琉球史のみならず、海域史や地図史研究など様々な研究分野に活用されることを切に願って本稿を終えたい。

《参考文献》

秋岡武次郎『日本地図史』河出書房、1955
安里進「寨官と大型グスクの時代」『新琉球史ー古琉球編ー』琉球新報社、1991
安里進「中世琉球王国の都市構造」首里城研究会レジュメ、2003.08.30
伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』吉川弘文館、2002
井上忠『貝原益軒』吉川弘文館、1963
上里隆史「古琉球・那覇の「倭人」居留地と環シナ海世界」対外史研究会レジュメ、2003.09.04
上原兼善『幕藩制形成期の琉球支配』吉川弘文館、2001年
梅木通徳『蝦夷古地図物語』北海道新聞社、1974
浦添市史編集委員会編『浦添市史』第二巻資料編1、浦添市役所、1981
応地利明『絵地図の世界像』岩波新書、1996
沖縄県教育庁文化課編『首里城跡　歓会門・久慶門内側地域の復元整備にかかる遺構調査』緑林堂出版、1988
沖縄県教育委員会文化課編『沖縄県文化財調査報告書第53集　ぐすく　グスク分布調査報告(Ⅰ)ー沖縄本島及び周辺離島ー』沖縄県教育委員会、1983
貝原益軒（益軒会編）『益軒全集・巻之五』国書刊行会、1973
川添昭二・棚町知彌・島津忠夫編『太宰府天満宮連歌史　資料と研究Ⅳ』太宰府顕彰会、1987
川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『新訂　黒田家譜』第三巻、文献出版、1982
川添昭二・福岡古文書を読む会校訂『新訂　黒田家譜』第七巻（中・下）、文献出版、1984
川村博忠『国絵図』吉川弘文館、1990
九州史料刊行会編『益軒資料』一、同会、1955
九州史料刊行会編『益軒資料』二、同会、1956a
九州史料刊行会編『益軒資料』三、同会、1956b
九州史料刊行会編『益軒資料』七、同会、1961
ケネス・ロビンソン「『海東諸国紀』写本の一考察」『九州史学』132
佐伯弘次「中世博多と地域交流」安藤保編『前近代東アジア海域における交易システムの総合的研究』（科研成果報告書）2000
佐伯弘次「室町後期の博多商人道安と東アジア」『史淵』140、2003
島尻勝太郎「護国寺の創建と日秀上人」『沖縄大学紀要』1、1980
申叔舟（田中健夫訳注）『海東諸國紀』岩波書店、1991
高木崇世芝「寛文8年前後の国絵図系蝦夷図に見える地名」『アイヌ語地名研究』1999
高木崇世芝『函館文化発見企画2　北海道の古地図　江戸時代の北海道のすがたを探る』五稜郭タワー株式会社、2000
高良倉吉「琉球・沖縄の歴史と日本社会」朝尾直弘・網野善彦・山口啓二・吉田孝編『日本の社会史　第一巻　列島内外の交通と国家』岩波書店、1987
高良倉吉『琉球王国』岩波書店、1993

高良倉吉「琉球王国成立期の首里城に関する覚書」丸山雍成編『前近代における南西諸島と九州ーその関係史的研究ー』多賀出版、1996
太宰府天満宮編『図録　太宰府天満宮』太宰府顕彰会、1976
田中健夫「『海東諸国紀』の日本・琉球図ーその東アジア史的意義と南波本の紹介ー」『東アジア通交圏と国際認識』吉川弘文館、1997
筑紫豊「太宰府天満宮と貝原益軒」『神道史研究』17-5・6、1969
知名定寛「尚巴志王咨文と古琉球仏教」『沖縄文化』93、2002
当真嗣一「いわゆる「土より成るグスク」についてー沖縄本島北部のグスクを中心にー」『沖縄県立博物館紀要』23号、1997
中村栄孝「『海東諸國紀』の撰修と印刷」『日鮮関係史の研究』上、吉川弘文館、1965
永山修一「キカイガシマの古代・中世ー〈南〉の境界領域へのまなざし」『東方学』6、2002
西日本文化協会編『福岡県史　近世史料編・福岡藩初期（上)』同会、1982
西日本文化協会編『福岡県史　通史編・福岡藩・文化（上)』同会、1993
西日本文化協会編『福岡県史　通史編・福岡藩・文化（下)』同会、1994
東恩納寛惇「申叔舟の海東諸国紀に現れたる琉球国図について」『史学』16-3、1937（『黎明期の海外交通史』東恩納寛惇全集3、第一書房、1979)
檜垣元吉『吉田家伝録』上、太宰府天満宮、1981
村井章介「15～17世紀の日琉関係と五山僧」『東アジア往還　漢詩と外交』朝日新聞社、1995
村井章介「中世国家の境界と琉球・蝦夷」村井章介・佐藤信・吉田伸之編『境界の日本史』1997
《史料》
外間守善校注『おもろさうし』上・下、岩波書店、2000
外間守善『混効験集　校本と研究』角川書店、1970
『琉球國由来記』（伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書』第一巻・第二巻、1940)
『琉球國旧記』（伊波普猷・東恩納寛惇・横山重編『琉球史料叢書』第三巻、1942)
原田禹雄訳注、『汪楫　冊封琉球使録三篇』（榕樹書林、1997)
（※その他の史料は参考文献に揚げた。)

《付記・1》
本稿作成至るまでには以下の方々から甚大なるご協力を賜った。記して深謝申し上げる。
新垣裕之・伊藤幸司・今井哲夫（忠敬堂)・上里隆史・浦添市立図書館・榎本渉・沖縄県立博物館・岡美穂子・岡本真・垣花稔・梶嶋政司・久手堅憲夫・ケネス・ロビンソン・朱雀信城・須田牧子・高木崇世芝・高橋秀行（全国古書籍商組合連合会)・太宰府天満宮（文化研究所)・鶴田啓・新島奈津子・西田友広・橋本雄・福岡市美術館・八木壮一（八木書店)・山本政昭
（五十音順・敬称略・トカラ科研メンバーは除く)
《付記・2》
本稿3（特に①のb・c）に関しては、上里隆史氏に全面的にご教示をいただいた。また地名の比定に関しては久手堅憲夫氏の甚大なご助力を得た。特に記して深謝申し上げる。

《付記・３》

本稿は、０～３-①を主に渡辺が、３-②～５を主に深瀬が執筆した。

〈資料１：道悦・円齋関係史料〉

①松壽菴竹森道悦

a．家系略記表[1]

竹森新兵衛貞俊
［貞俊の嫡男］竹森新右衛門次貞〔石見守〕天文 19～元和７（1550-1621）卒 71 歳
［次貞の嫡男］清左衛門貞幸　天正６～慶安２（1578-1649）72 歳
※妻が吉田長利の四女
［貞幸の嫡男］貞右衛門三安　慶長８～万治元（1603-1658）54 歳
［三安の嫡男］貞右衛門貞武（以順）　正保元～
※前妻は吉田久大夫利安の娘・後妻が竹森道悦の娘
［貞武の嫡男］貞右衛門貞矩　享保２～
※母は竹森道悦の娘
［次貞の三男］善兵衛吉次　天正 10～延宝元（1582-1673）92 歳
［次貞の八男］新右衛門利友　慶長４～延宝２（1599-1674）76 歳　600 石
［利友の嫡男］新右衛門利実（素夕）｛利友の二男｝　600→200 石
［利実の嫡男］新之丞実信　200 石
［実信の養子］九右衛門｛大音与兵衛の二男｝
［次貞の九男］道策　慶長８～寛永 10（1603-1633）31 歳
［道策の養子］**道悦**｛利友の長子｝　1625？-1699　74 歳　250 石
［道悦の嫡男］文右衛門　250 石
［次貞の弟］松若丸　天文 21～寛永３（1552-1626）46 歳
※（次貞の）二男非世早世。／四男新七無傳弟六七者女子也。

※竹森新右衛門次貞：父の貞俊は姫路近郊大野郷日岡八幡宮の社職であったが、永禄二年（1559）に嫡男新次郎（次貞）・次男若松と小寺職隆（黒田如水の父）に仕えたという。新右衛門次貞は天正八年（1580）九月に旗奉行に命ぜられ新知二百石を与えられた。その後段々と禄を加え、筑前入国後の慶長七年（1602）十二月二十三日には、石高も二千五百石に加増された。黒田二十四騎の一人。

※竹森新右衛門利友：若年の頃、黒田長政に仕えた。黒田忠之の代に浪人となるが、後に召還され采地 200 石で長柄頭・銃頭を勤めた。正保四年（1647）の黒船来航の際の軍功により 500 石に加増され旗奉行かつ目付頭に命ぜられた。『寛文分限帳』「御横目惣頭又証拠

[1] 『竹森家記』『吉田家伝録・上』から筆者がまとめた内容である。なおその際に、西日本文化協会編『福岡県史　近世史料編・福岡藩初期（上）』「竹森家文書」（同会、1982 年、51-52 頁）を参照した。また『益軒全集・巻之五』（1973 年）の「黒田家臣伝」に「竹森石見伝」及び「竹森松若伝」が載せられている。

判」の項に「五百石　竹森新右衛門利友（御旗奉行御境目兼帯）」と見える（『福岡藩分限帳集成』37 頁）。後、黒田光之の在位中に更に 100 石を加えられ旗奉行・目付頭及び国内の山林の裁許を命ぜられている。

b.『竹森家記』（東京大学史料編纂所蔵本）

：天和三年（1683）に道悦が祖先の旧稿を改正し新たに写した竹森家の家伝。

【史料抜粋】

次貞九男道策傳

道策童名九郎次郎。慶長八年癸卯生福岡。幼而多病也。父兄愍[2]於病軀之衰弱、而令習醫術也。十八歳而遊学於京師、為儒医師事、於土師氏玄同　号徳菴惺窩先生之門弟也、而通習於經史百家之書也。又入壽昌院玄琢之門而　玄琢者野間氏　研究素難得劉張李三家秘也。遊学於二子之門、十有一年、然後其病漸重矣。遂還本國、而養病也。羸瘦骨立、而起臥不安。寛永十年十月廿二日卒去。行年三十一。葬福岡之徳永寺。号覺源道策矣。有子名道悦　童名得伯父、舊名云少助、蓋道策蚤[3]死無實子、養利友之子、其姪者而譲於家書及青嚢[4]也。道悦十九歳、而赴京師属養壽院道作法印、而受家傳得菴称号松壽菴也。蓋遊学於京師二十年也。問病家之暇日、窺下冷泉羽林集陰之門墻、而略見於經史之端緒也　集陰者惺窩先生[5]之一子也。継下冷泉家。後帰本國、任於光之公。

c.『吉田家伝録』[檜垣 1981：126-127 ほか]

：福岡藩の家老・当職の要職を歴任した吉田家五代式部治年が、隠退後の享保七年から編纂を開始し十八年に完成した家伝録。初代長利の外曾孫である竹森貞右衛門貞武入道以順の「覚書」等が引用され、竹森家についても詳しい記載がなされた。その大半は『竹森家記』と同様であるが、『竹森家記』には見られない情報も含まれている。

【史料抜粋】

八男竹ノ森新右衛門利友

母同ジ　初メ八兵衛　中比ロ弥左衛門　隠退シテ道実（タウシツ）ト号ス　長政君利友若年ノ比ロ部屋住料（ヘヤリヤウ）十人扶持蔵米三十石賜フ　忠之君ノ御代（ミヨ）ニ至リ　浪人トナリ唐津領深江邑（カラツリヤウフカエユウ）ニ住ス　後召返サレ采地二百石賜ヒ　長柄頭（ナガエガシラ）命ジラレ　又百石禄ヲ加ヘテ銃頭（シウトウ）命ジラル正保四年丁亥（ヒノトイ）ノ歳肥前長崎ニ南蛮船（ナンバンフネ）（時俗ガリアン舟或黒舟ト云）来ルノ時焼草（ヤキクサ）船ニ乗事ヲ一番ニ請願（コヒネガウ）　忠之君　是レヲ感ジ玉ヒ二百石増（マ）シ加（クハヘ）テ旗奉行且目附頭兼命ジラ

---

2 愍＝あわれむ。

3 蚤＝早。

4 青嚢＝①印を入れる袋②医術。

5 藤原惺窩（1561-1619）：江戸時代の儒学者。藤原定家の一二代の孫。藤原惺窩は細川荘（三木市細川町）の荘園を領した冷泉為純の第三子。

ル　光之君ノ御代ニ至リ百石加ヘテ都合六百石賜ヒ　旗奉行目附頭及ヒ国山林ノ載許命ジラル　利友ノ一男竹ノ森松寿庵（初メ庄助）父利友浪人ノ間京都ニ上リ医術ヲ学後五島淡路ノ守盛房ノ招キニ応ジテ五島ニ下リ　采地二百五十賜フ　五島盛房ノ室ハ櫛笥大納言ノ女メ　松寿庵ノ妻ハ大納言ノ室ノ妹ナリ　延宝三年乙卯（ママ）ノ歳利友ノ願ニ依テ光之君ヨリ盛房ニ請テ松寿庵ヲ福岡ニ召返サレ　新地二百五十石ヲ賜フ　松寿庵の一女半井隠竹ノ妻トナル　二女竹ノ森以順ノ妻トナル　三女庄野十右衛門ノ妻トナル　四女辻人木ノ妻トナル　五女博多ノ商大賀善右衛門ガ妻トナル　六男竹ノ森文右衛門父ノ禄ヲ受続テ士官ス　其ノ子当竹ノ森文右衛門ナリ　又新右衛門利友ノ二男竹ノ森新右衛門利実ニ父ノ禄六百石賜ヒ　旗奉行並ニ山林載許命ジラレ　利友ニハ隠居料トシテ十人扶持賜フ　利実後故有ツテ禄ヲ削ラレ　嫡子竹ノ森新之丞実信ニ二百石ヲ賜フ　利実剃髪シテ素夕ト号ス　実信宰府代官命ジラル　後指セル故無フシテ自殺ス　狂気ナルニヤ　実信男子無キニ依テ大音与兵衛ノ二男ヲ以家名ヲ継ガシメ扶持ヲ賜フ　是レ当竹ノ森九右衛門ナリ

②熊本伊右衛門入道圓齋

『筑前名家人物志』（森政太郎編、文献出版、1979 年[6]）

眞碩　熊本伊右衛門守清蘇一子圓齋ト云フ。衣笠守昌ノ門人。

眞碩　熊本伊右衛門衣笠守昌門人守清眞碩ノ子ナリ。

〔参考：衣笠守昌[7]〕

守昌　衣笠半助又タ駿毛翁ト號ス。狩野探幽ニ畫ヲ學ヒ頗ル妙手タリ。光之公ニ仕ヘ十石三人扶持ヲ賜フ。其ノ後チ綱政公ヨリ貳人扶持ヲ加ヘラル。寶永二年[8]八月五日卒ス。衣笠畫祖タリ。（第一代）（『筑前名家人物志』）

---

[6] 1907 年本の復刊。

[7] 守昌に関しては西日本文化協会編『福岡県史　通史編・福岡藩・文化（下）』「衣笠守昌」（同会、1994 年、373-376 頁）に詳しい。また同書 381 頁は、正徳三年（1713）に藩主宣政に席画を命ぜられた画家として眞碩の名をあげつつ、円齋かその同名の子を指すのかは判然としないと断っている。

[8] 1705 年。

〈資料２：竹森道悦の奉納した地図一覧〉

No.	名称	奉納年月	道悦らによる墨書部分の記載	所蔵・情報	備考
1	琉球國圖 175.8×87.8 （手書・彩色）	元禄九年 （八月吉辰）	「琉球國圖／奉納／天満宮廣前／元禄九丙子／八月吉辰」「松壽菴竹森道悦奉上／熊本伊右衛門入道圓齊七十一歳書焉」	沖縄県立博物館（現在閉架）。	本文参照。
2	大明全圖 140.6×121.3 （手書・彩色） →①参照	元禄九年 （八月吉辰）	「大明全圖／奉納／天満宮廣前／元禄九丙子八月吉辰」「松壽菴竹森道悦寫之／奉上／熊本義里入道圓齋彩之」	太宰府天満宮。［太宰府 1976］に影印が掲載。	「康熙二年癸卯上元吉旦姑蘇王君甫発行」「大明京省九辺外国府州県路程図、本朝帝畿書房、梅村彌白重梓」→康熙二年（1663）に中国で作られた地図が日本の京都で模刻され、それを道悦らが書写［太宰府 1976：258］。
3	朝鮮國圖 94.1×138.6 （手書・彩色） →②参照	元禄九年 （八月吉辰）	「朝鮮國圖／奉納／太宰府天満宮廣前／元禄九年丙子八月吉辰」「松壽菴竹森道悦七十一歳寫焉）」「熊本伊右衛門入道圓齊七十一歳圖之」	太宰府天満宮。［太宰府 1976］に影印が掲載。	地図の右側に地名などの解説が書き込まれている。墨書からは元禄九年に道悦・円齋が共に 71 歳であったことが分かる。
4	蝦夷島圖 155.3×93.3 （手書・彩色）	元禄九年 （八月吉辰）	「蝦夷嶋圖／奉納大宰府／天満宮廣前／元禄九年丙子／八月吉辰」「松壽菴竹森道悦奉上／畫工／熊本伊右衛門入道圓齋七十一歳」[1]	札幌市個人蔵。影印等なし。	研究として［梅木 1974］［高木 1999］がある。特に後者には全ての地名情報が掲載される。「正保日本図」の蝦夷部分と似るが完全一致はせず。［梅木 1974］では「蝦夷地のみを描いた現存の地図としては世界最古のものか」とされ、［高木 1999］では「寛文８年～10 年頃の内容を持つ蝦夷図」と推定される。
5	肥前長崎圖 173.0×93.0 （手書・彩色） →③参照	元禄九年 （八月吉辰）	「肥前長崎圖／奉納／天満宮廣前／元禄九丙子／八月吉辰」「松壽菴竹森道悦奉上／畫工／熊本伊右衛門入道圓齋」	ピーボディ・エセックス博物館所蔵。カラー写真あり（③参照）。	南はイワウカ嶋（伊王島）より描き、四本の朱線で唐船航路を記入。西泊、戸町の両番所が頗る大きく城郭の如し。出島には大小館が四つ。向かって西奉行所、東野外れに東奉行所。「江戸町」他名丁、橋、特に寺院名が詳細。唐人屋敷は見えず、「松平肥前守茶屋」「唐人阿蘭陀玉薬入蔵」が描かれる。（『忠敬堂古地図目録』1（1970）より）

[1] ご所蔵者の特別の許可を得て墨書情報をいただいた。記して深謝申し上げる。

6	大内裡圖 140.8×96.0 （手書・彩色）	元禄九年 （八月吉辰）	「大内裡圖／奉納太宰府／天満宮廣前／元禄九丙子／八月吉辰」「松壽菴竹森道悦七十一歳寫焉／熊本伊右衛門入道圓齋圖之」	不明。本地図情報は全て『忠敬堂古地図目録』1・2・5（1970・71・73）によるものである[2]。	上段に「京程」と題して南北東西の各条の詳細な説明文を載せる。図は坊・条東西南北七十二、八省及び諸殿舎など。下段に四保十六町図の縮図を載せる。
7	京都圖 164×123 （木版・手彩色） →④参照	元禄九年 （八月吉辰）	「京都圖／奉納／太宰府／天満宮廣前／元禄九年丙子／八月吉辰」「松壽菴竹森道悦謹上」	京都大学付属図書館蔵（大塚京都図コレクション）[3]。『日本の古地図４』（講談社、1976、6-7頁）にカラーで掲載。	林吉永が貞享三年（1686）に出版した京大絵図の元禄四年再版物。「元禄四歳九月吉辰御繪圖所林氏吉永」と刷られている。
8	日本國圖 69.1×163.7 （木版・手彩色）	元禄九年 （八月吉辰）	「日本國圖／奉納／太宰府／天満宮廣前／元禄九年丙子／八月吉辰」「松壽菴竹森道悦謹上」	不明。本地図情報は全て『忠敬堂古地図目録』7（1749）によるものである[4]。	秋岡武次郎『日本地図作成史』の推定に照らして、貞享二年刊行物とされる。宿駅を丸、城下を角で示し、御領主名と領高を短冊形に詳掲する。下辺に五畿七道別に国名と石高の一覧表を載せる。
9	世界圖 ①189.8×119.9 ②189.1×120.7 ③189.3×119.3 ④189.5×119.6 （手書・彩色）	元禄十一年 （九月吉日）	「世界図奉納太宰府天満宮広前」「元禄十一年戊寅九月吉日松寿庵道悦奉上　熊本義理入道圓齋画」［「共四冊」の朱書有り］	不明。本地図情報は全て『忠敬堂目録』2（1971）によるものである。	各図とも、上辺より「影之日筋」「夏之日筋」「世界之眞中之筋」「南之日筋」の線が記入。楕円でなく平面投影式による図だが、両極円球図・赤道等が描かれ、第一図の右端と第四図の左端が完全に接続する点から、作者は大地が球体であるとの認識を有していたとされる。マテオ・リッチ系の世界図（→「両儀玄覧図」）の強い影響を受けるも、それらの地図とは異なる点が多い。本図は「金・銀の島」「夜人国」を示さず、北極圏の注記も「両儀玄覧図」より九字多い。南洋諸島は他図より正確で、アフリカは特にリッチ図と異なっている。

2 目録５に小さな影印が載る。
3 金田章裕編『京都大学所蔵古地図目録』京都大学大学院文学研究科、2001、130頁。
4 小さな影印が載る。

10	當代博多圖 サイズ不明 （手書・彩色）	元禄十一年 （九月吉日）	「當代博多圖奉納／太宰府／天満宮廣前」「元禄十一戊寅年九月吉日」「松壽菴竹森道悦奉上／熊本義里入道圓齋畫」	不明。本地図情報は全て『九州古書大市会出品目録』（九州古典籍商協議会 1991）によるものである[5]。	1587 年、豊臣秀吉が博多を検分して、博多再興の町割りをした時の図。料紙十二枚継ぎ。

※『琉球國圖』以外の地図に関しては多くの方から情報のご提供やご協力・教示を得た。

『大明全圖』『朝鮮國圖』に関しては朱雀信城氏のご教示によりその存在を知り、また太宰府天満宮（文化研究所）からは関連情報のご提供と地図掲載のご許可をいただいた。

『蝦夷嶋圖』に関してはご所蔵者及び高木崇世芝氏の甚大なるご協力・ご教示を賜った。また高木崇世芝氏は、竹森道悦が複数の地図を太宰府天満宮に寄進した点を既に［高木 2000：99］において指摘されており、このリストに載せた地図の大半は氏のご教示に負うところが大きい。

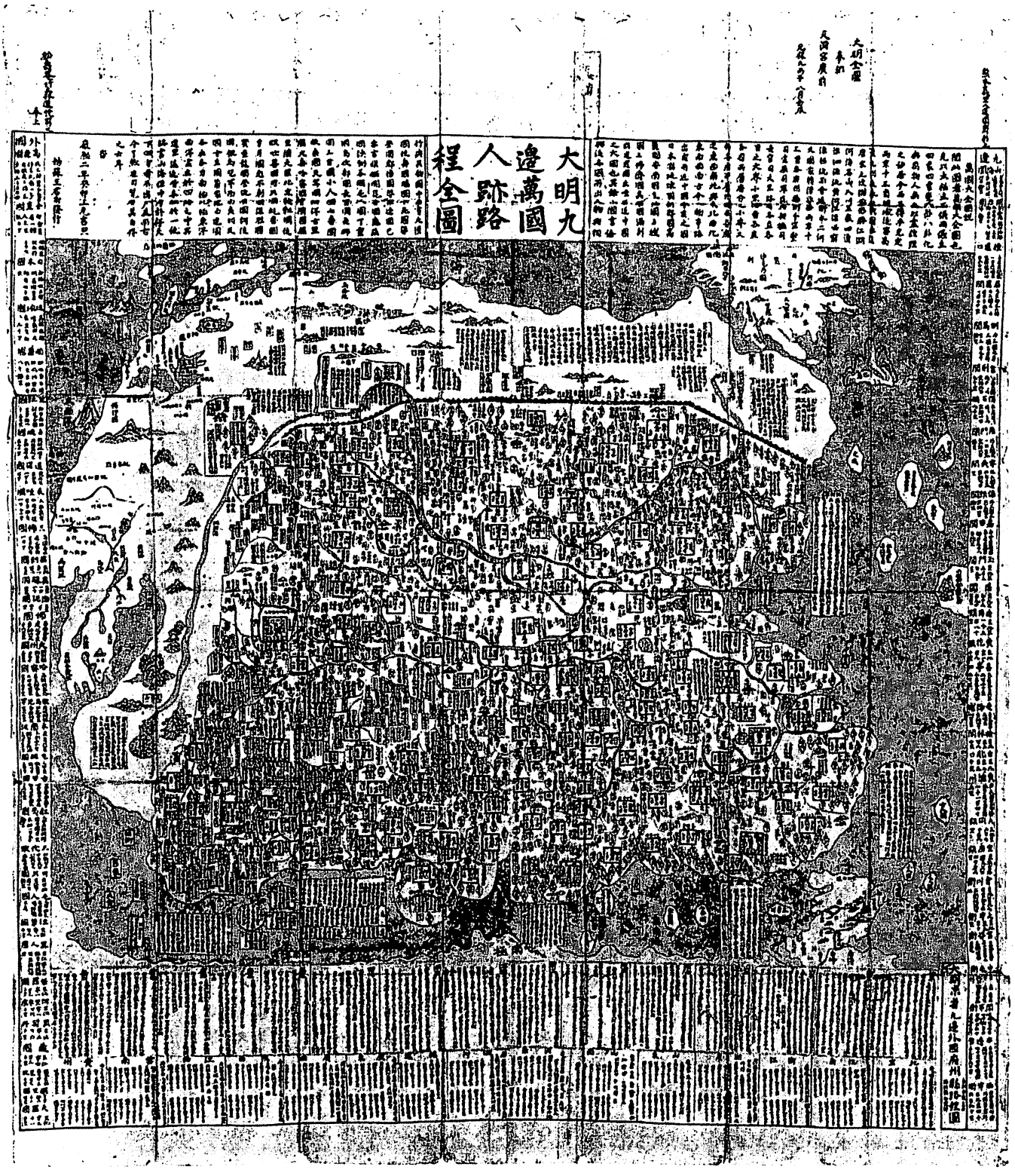
現在所在地が明らかではない『大内裡圖』『日本圖』『世界圖』、及び所在は判明したものの文字情報などを判別するに十分な影印のない『肥前長崎圖』に関しては、かつてこの古地図を扱った忠敬堂の詳細な目録に全面的に依拠した。忠敬堂の今井哲夫氏からは関連情報のご提供と目録引用のご許可をいただいた。

また散逸したこれら古地図の存在を確認するための情報収集作業において、高橋秀行氏（全国古書籍商組合連合会）及び八木壮一氏（八木書店）の懇切なご指導・ご協力を賜った。

この短期間でこれだけの情報を収集できたのは一重にこうした方々のご助力のお陰である。ぶしつけな問い合わせに快く応じて下さったこれらの方々に、衷心より御礼申し上げる。

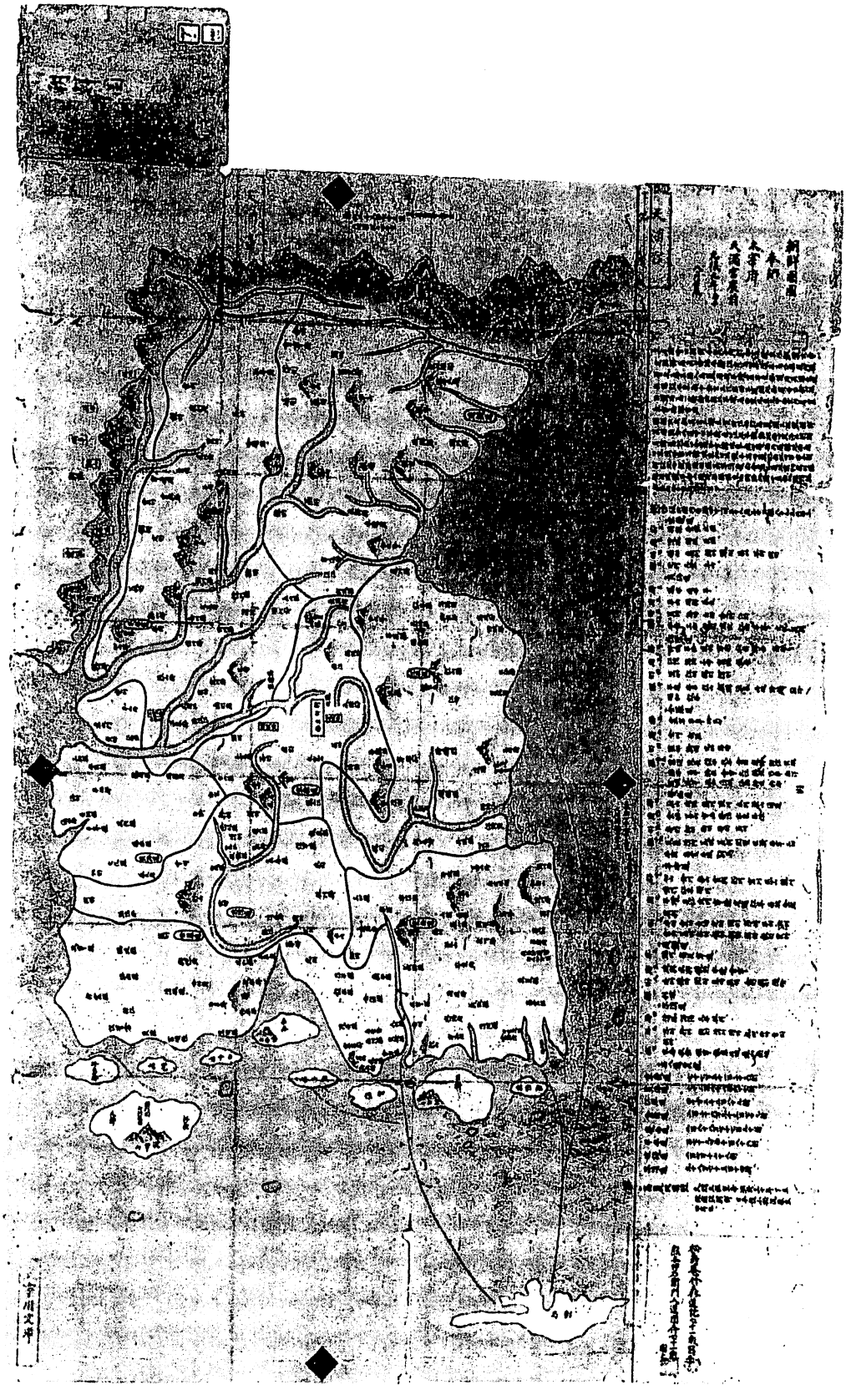
5 カラー版が掲載される。

①大明全圖



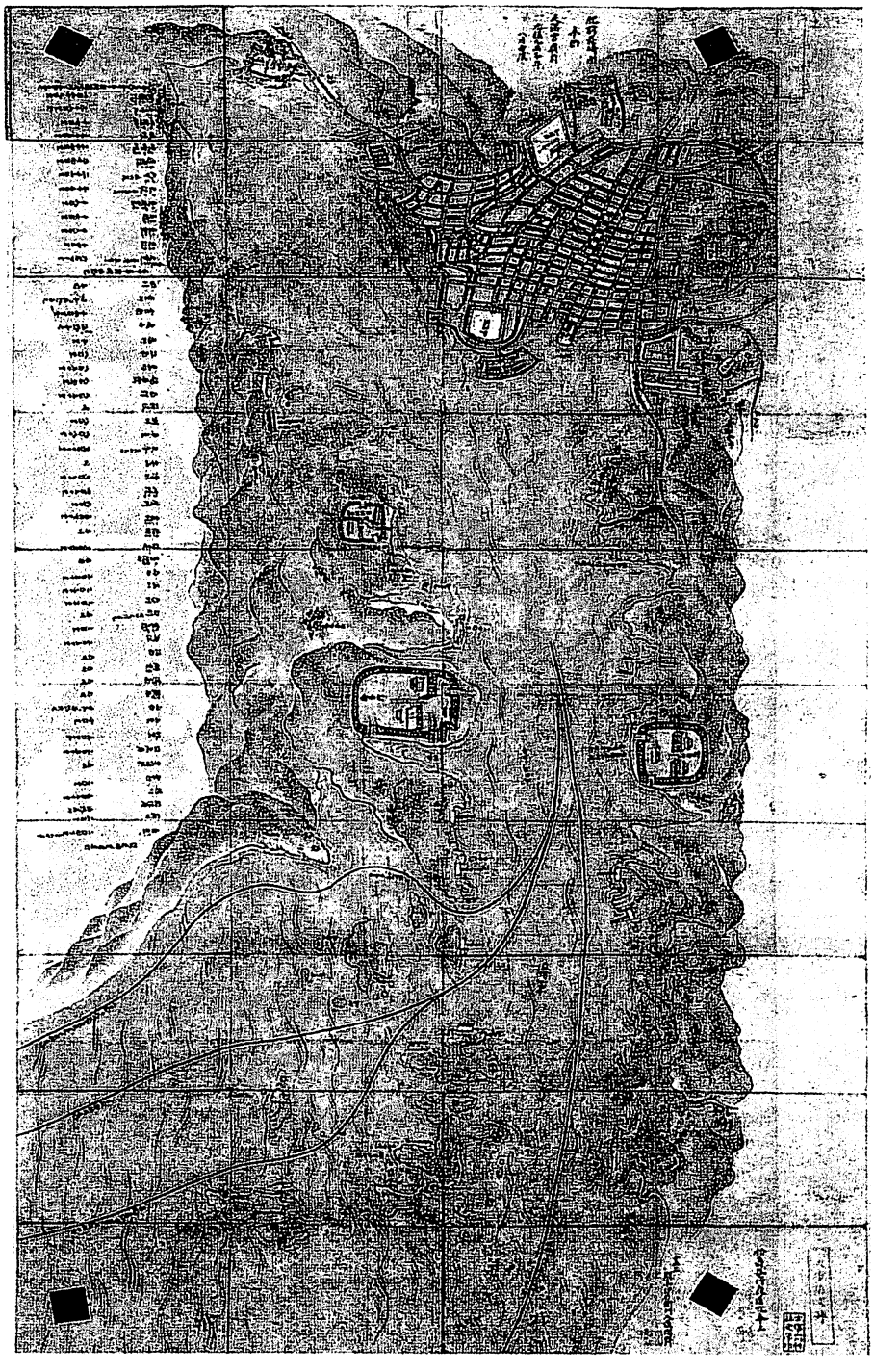
太宰府天満宮文化研究所所蔵。太宰府天満宮編『圖禄　太宰府天満宮』（太宰府顕彰会、1976、140頁）より転載。

②朝鮮國圖



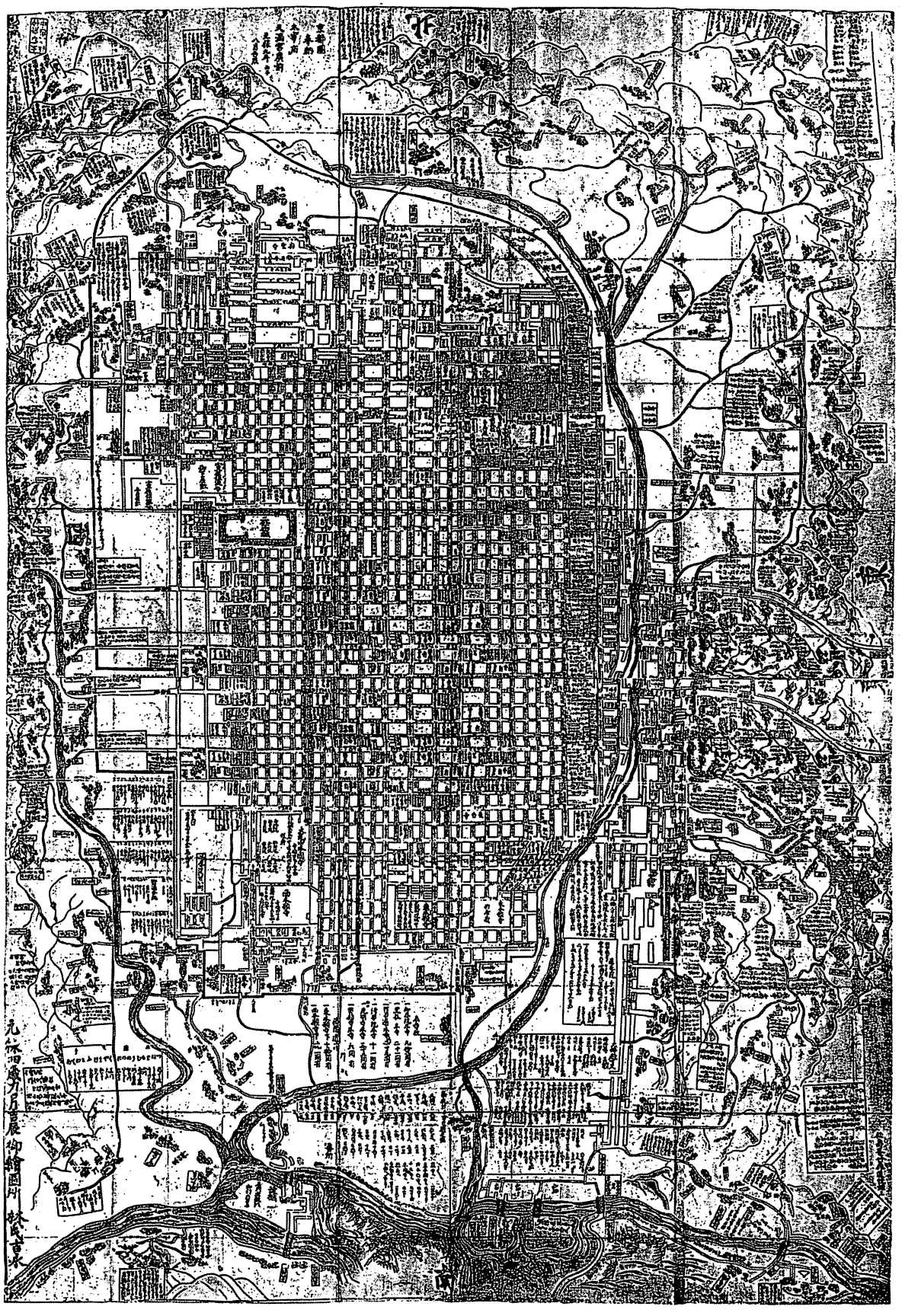
太宰府天満宮文化研究所所蔵。太宰府天満宮編『圖禄　太宰府天満宮』（太宰府顕彰会、1976、142頁）より転載。

③肥前長崎圖



ピーボディ・エセックス博物館（Peabody Essex Museum）所蔵
Gift of Philip Hofer and Francis B. Lothrop, 1972
東京都江戸東京博物館・ピーボディ・エセックス博物館編『日米交流のあけぼの－黒船きたる－』（東京都江戸東京博物館、1999、12頁）より転載。
※熊本圓斎の作で、竹諸道悦が天満宮に奉納した絵図。「長崎より異国道程」とあり、中国各地やオランダまでの里数が付されている。（同書12頁）

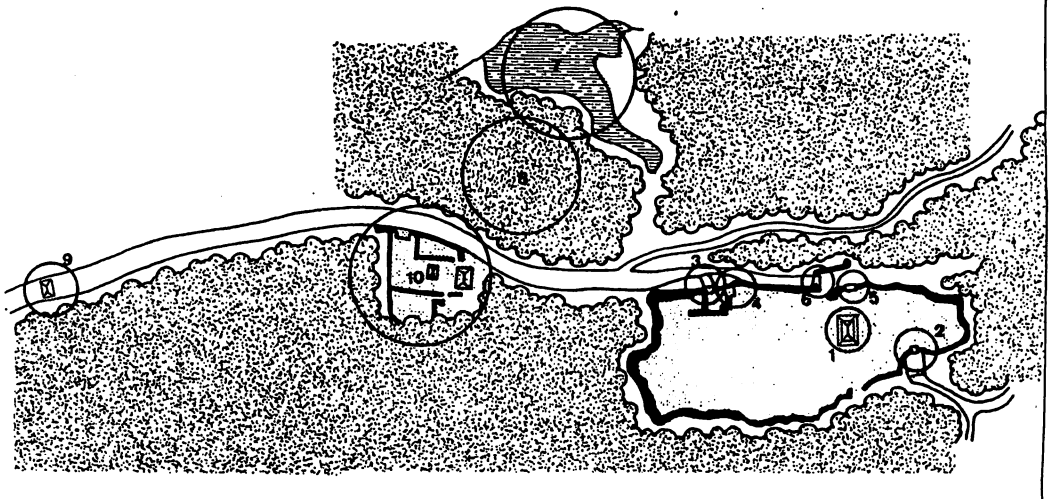
④京都圖



京都大学付属図書館蔵（大塚京都図コレクション）。矢守一彦・大塚隆編『日本の古地図④京都』（講談社、1976、6-7頁）より転載。

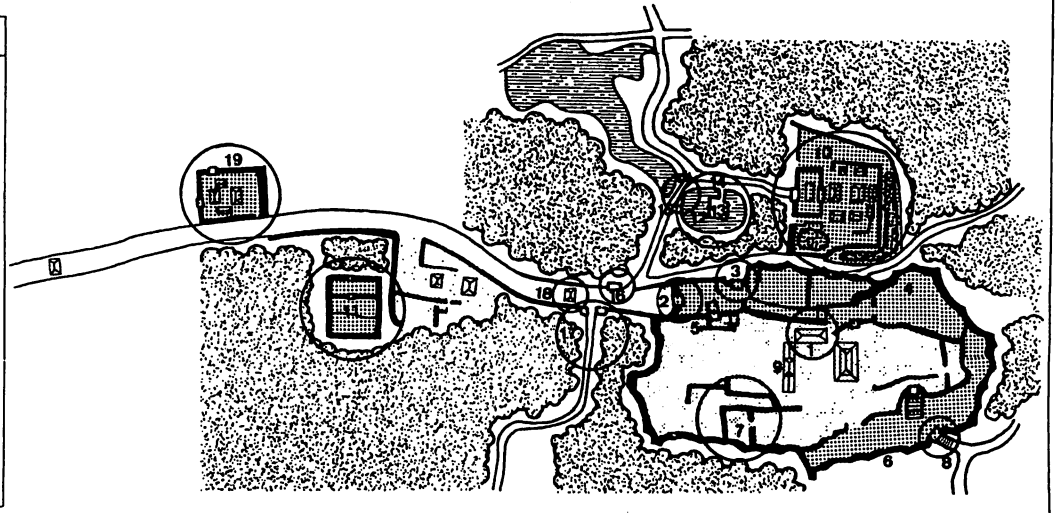
〈資料３：首里城の内郭と外郭〉

番号	名称	創建年代
1	正殿	高楼を創建とあるが場所は不明
2	美福門	1422～1489年頃
3	瑞泉門	1406～1469年頃
4	淵刻門	〃
5	淑順門	〃
6	右掖門	〃
7	龍潭	1427年
8	安国山	〃
9	中山門	1428年
10	天界寺	1450年



第一尚氏王統時代の首里城および周辺想像図

番号	名称	創建年代
1	北殿	1506～1521年頃
2	歓会門	1477～1526年頃
3	久慶門	〃
4	北側外郭城壁	〃
5	龍樋	1523年設置
6	南側外郭城壁	1543～1546年
7	京の内石橋	〃
8	雄世門	〃
9	奉神門(欄干)	1562年
10	円覚寺	1494年
11	玉陵	1501年
12	円鑑池	1502年
13	弁財天堂	〃
14	天女橋	〃
15	龍潭橋	〃
16	園比屋武御嶽	1519年
17	真玉道(碑文)	1522年
18	守礼門	1527～1555年
19	大美御殿	1547年

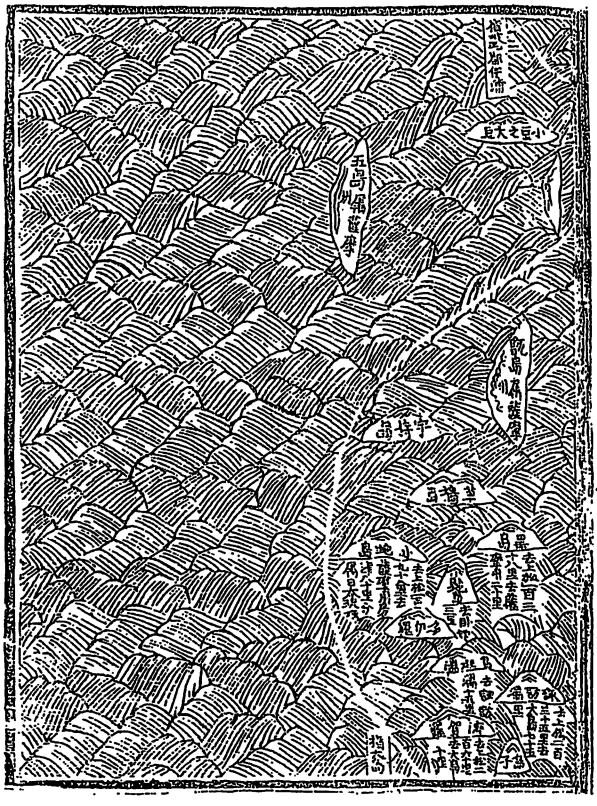


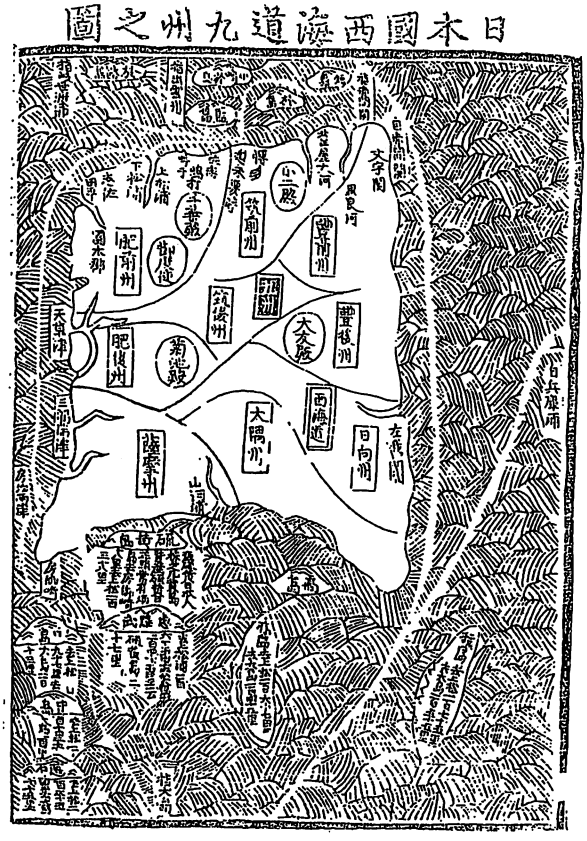
第二尚氏王統初期の首里城および周辺想像図

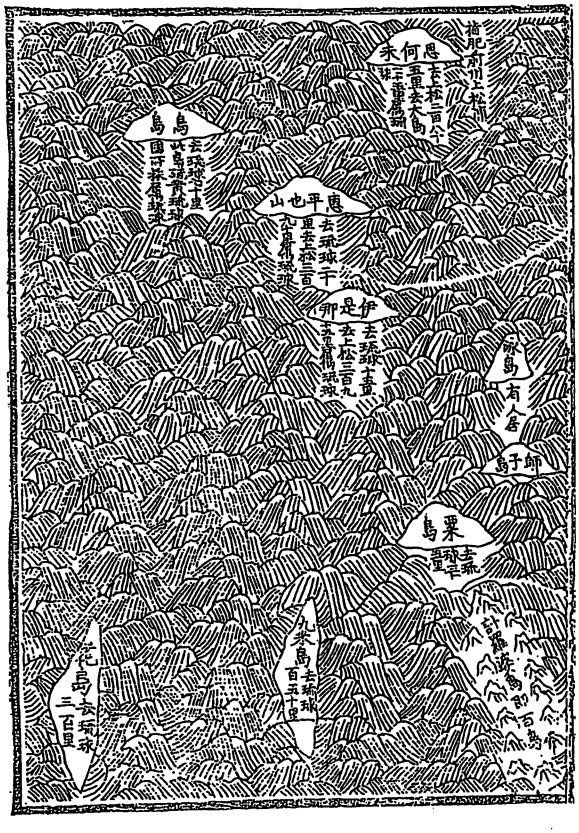
（財）海洋博覧会記念公園管理財団総監修、勝浦康之・鈴木嘉吉監修『首里王府　首里城』（ぎょうせい、1993、120頁）より転載

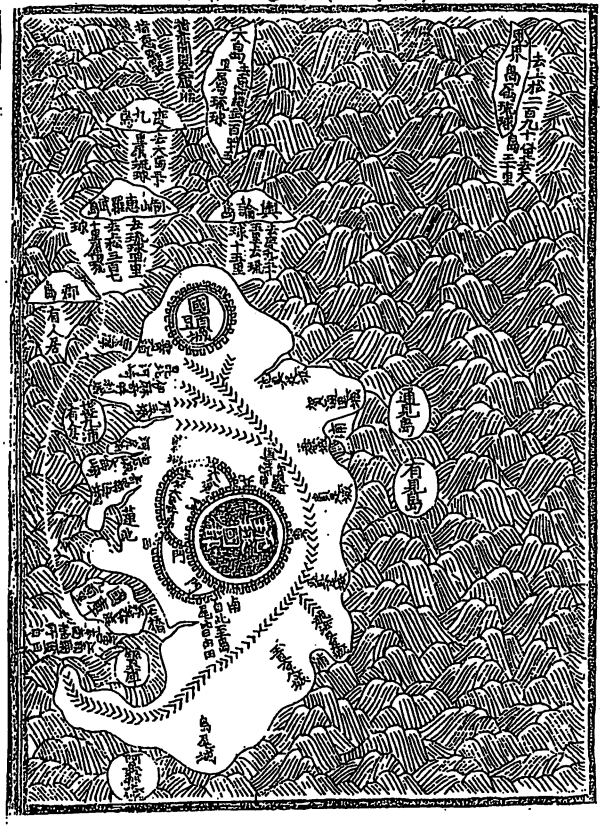
（5）『海東諸国紀』「日本国西海道九州之図」「琉球国之図」

（東京大学史料編纂所蔵本［申（田中訳注）1991：384-385 及び 390-391］より転載）









（6）琉球國圖と海東諸國紀の比較表

『琉球國圖』（県博）	『海東諸國紀』（東大史料編纂所本）
日向國／大隅國／薩摩國	日向州／大隅州／薩摩州
房泊兩津／房御崎	房泊両津／房御崎
海門岳	山河浦
種島／自博多百七十七里／至大嶋百五十五里	種島／去上松一百七十五里、去大島一百五十五里
鸞／自博多百六十九里／至大嶋百四十三里	亦島／去上松一百六十七里、去大島一百四十三里
高嶋	高島
硫黄嶋／自房御崎十八里／自博多百四十里／惠羅相去二十七里／此嶋硫黄日本國採之用／凡硫黄産出之嶋常有𤍠氣	硫黄島／産硫黄日本人採之、凡黄島皆産硫黄、日正照常有焔島、去房御崎十八里、去上松一百三十八里
惠羅武／自博多百六十七里／至大嶋百四十五里	惠羅武／去上松浦百六十五里、去大島二百四十五里、去硫黄島二十七里
口嶋／自博多百九十九里／至大嶋百十三里	口島／去上松九十七里、去大島一百十三里
中嶋／自博多二百十二里／至大嶋百里	中島／去上松二百十里、去大島一百里
惡石／自博多二百三十七里／至大嶋七十五里	悪石／去上松二百三十五里、去大島七十五里
黒嶋／去薩摩二十里／自博多百四十里	黒島／去上松一百三十八里、去薩摩州二十里
臥蛇／自博多二百里／去薩州房津八十里余／半屬日本／半屬琉球	臥蛇島／去上松一百九十八里、去薩摩州房津八十里、分属日本琉球
両嶋間三里	去臥蛇三里
小臥蛇嶋	小臥蛇島
多伊羅	多伊羅
鳥起湍	島起湍
両島間十五里	去諏訪湍十五里
諏訪湍／自博多二百廿二里／至大嶋九十九里	諏訪湍／去上松二百三十五里、去大島七十五里
渡賀羅	渡賀羅／去二百六十里、去大島十里
嶋子	島子
琉球内／鬼界嶋／自博多三百里／至琉球百五十里	鬼界島／属琉球、去上松二百九十八里、去大島三十里
琉球内／大島／自博多三百十二里／至琉球百里	大島／去恵羅武一百四十五里、属琉球
度九嶋／自博多三百四十二里／至琉球七十里	度九島／去大島三十里、属琉球
琉球内／小崎惠羅武／自博多三百七十二里／至琉球四十里	小崎恵羅武島／去琉球四十里、去上松三百七十里、属琉球
與論嶋／自博多三百九十七里／至琉球十五里	與論島／去度九五十五里、去琉球十五里
琉球内／思柯未／日本唐土之境／自博多二百八十七里／至大嶋二十五里	思何未／去上松二百八十五里、去大島二十五里、属琉球
國頭城	國頭城
雲見泊／要津	雲見泊／要津
伊麻奇時利城／昆北何奇	伊麻奇時利城／昆北河崎
―	那五城
世世九浦／有人里	世世九浦／有人居
河尻城	河尻泊
白石城	白石城
大西崎	大西崎
奇羅溪城	奇羅波城[1]
慶禅寺	―

1 「波」の字については（3）の情報を参照のこと。

毒大嶋鬼界之舩／皆入此浦	―
國聖寺／僧禄	―
法音寺	―
飛羅加泊	―
此江湖來往有滿乾／廣一里	―
那波皆津／日本人本嶋人家有此	那波皆津
此地王之庫藏／衆多有	國庫
九面里／江南人家在此	九面里
波上熊野権現	―
石橋／此下有五水	石橋
那波皆津口／江南南蛮日本之／舩入此浦	湾口／江南南蛮日本商舶所泊
江南南蠻寶物在此　／見物具足廣	寶庫
池具足城	池具足城
賀通連城	賀通連城
浦	浦
五欲城	五欲城
中具足城	中貝足城
鬼具足城	鬼具足城
越法具足城	越法具足城
玉具城	浦／玉具足城
守城／嶋尾城	島尾城
田野間人民衆多	―
阿義那之城	阿義那之城
山間田畠人家多	―
北／自是至國頭山峯嶮	北／自此至国頭皆山
浦傍城／自内裏至此一里	浦傍城
護國寺	―
蓮池	蓮池
太倉／执政人在所	大倉／王弟大臣所居
西	西
南／自是西皆田畠也	南／自此至島尾皆由田
皆人里	―
東	東
門×３	門×３
琉球國	琉球國都
鳥嶋／至琉球七十里／此嶋硫黄琉球國所取	鳥島／去琉球七十里、此島硫黄琉球國所採、属琉球
琉球内／惠平也嶋／自博多三百九十二里／至琉球二十里	惠平也山／去琉球二十里、去上松三百九十里、属琉球
郡嶋／有人里	郡島／有人居
琉球内／伊是那／自博多三百九十七里／至琉球十五里	伊是那／去琉球十五里、去上松三百九十五里、属琉球
泳嶋／有人里	泳島／有人居
師子嶋	師子島
粟嶋／自琉球三十五里	粟島／去琉球三十五里
計羅婆嶋／即百嶋也／自琉球五十里	計羅婆島即百島
九米嶋／自琉球百五十里	九米島／去琉球一百五十里
花嶋／自琉球三百里	花島／去琉球三百里
有見嶋	有見島
通見嶋	通見島